

公立大学法人 滋賀県立大学

スチューデントファーム

「近江楽座」

まち・むら・くらしふれあい工舎

2010年度 活動報告書

はじめに

地域活動で気づく、日常の豊かさ

近江楽座は8年目に入った。地域活動を経験して学生たちは気づきはじめています。今の日常がどうやって築かれてきたのか。何のために地域の祭りや、さまざまな活動があるのか。人々は日々たゆまぬ努力をしている。その結果として静かな日常が待っているということ。地域の人々も気づきはじめています。2011,3,11 以後の日本人が思い描き始めたもの。それは普段通りの普通の日常の暮らしである。重箱の角を突くような地域の課題探しをするのではなく、地域の価値を見つけ共感する姿勢だ。ひとつの活動を持続、醸成させていくことで気づくこと。地域貢献だとか、産学連携だとか、キャリア教育だとか、インターンシップだとか、聞こえの良い言葉はいくらでも並べ立てることはできる。「近江楽座」の意義をもう一度見直してみたい。

平成22年度は新旧合わせて22のプロジェクトがしっかりと地に脚をつけた活動成果を魅せてくれた。その分野と領域は、環境、福祉、まちづくり、伝統、食生活、1次産業など多岐にわたっている。学生たちは苦労しながら、自分で考えて工夫するマネジメント力をつけ、現場でコラボレーションの道筋を見つけ、いつしか地域の状況に応えるコミュニケーション力を発揮しはじめています。そんな学生たちの活動へのモチベーションはどこから生まれてきているのだろうか。大学での研究領域に根ざしつつも、自身の大学生活への真摯な眼差しから、地域に飛び込んで行くという目標が生まれる。学生たちには地域というもう一つのキャンパスがある。それを提供、協力いただいている地域の方々の熱心な指導や助言は、学生たちの活動をより意義あるものに高めている。新しく近江楽士と命名された副専攻の地域教育の取組みが始まる。黎明期の学生への啓蒙と実践を近江楽座は全面的にサポートしていくことになる。その受け皿として何年

も続けている老舗と呼ばれる活動のフィールドを活用したい。余裕をもって進められる活動には、他の活動にも協働の視点をむけ、横断的な機会を生むだろう。学生たちの学びのモチベーションをさらに高めていき、社会化していく。それは滋賀県立大学がめざした理想に近づいているのかもしれない。同じことを10年続けられる力があるだろうか。昨年の活動を総括せよ! 次年に新しい活動を企画せよ! マンネリになっていないか! 単年度主義のそんな外部からのプレッシャーに学生たちはさらされてきた。しかし大学には次々と新しい学生が入ってくる。そして入れ替わっていく。同じ活動を新しい人材が受け持って継続させていく。そこから新たな活動の展開が自然と生まれてくる。大袈裟な活動を期待しているわけではない。日常の気づきを生むような学生たちのバトンリレーを見守りたい。

平成23年8月近江楽座専門委員会委員長
印南比呂志
(人間文化学部 生活デザイン学科)

目次

はじめに	3
目次	5
1 近江楽座について	6
1-1 近江楽座とは	6
1-2 プロジェクト区分	7
2 プロジェクトの採択について	8
2-1 応募件数および採択件数	8
2-2 プロジェクト募集	8
2-3 プロジェクト審査	8
3 活動報告	11
4 共通プログラムの報告	57
4-1 楽座セミナー 2010	58
「イザ！カエルキャラバン！ In HIKONE」 実行委員募集（仮）	
4-2 中間面談	60
4-3 環びわ湖大学地域交流フェスタ 2010	62
4-4 他大学との交流〈金沢大学〉、〈兵庫県立大学〉他	64
4-5 成果報告会	66
4-6 情報発信	70
5 地域の声	71
5-1 活動現場を訪ねて	72
5-2 地域関係者のメッセージ	76
6 付録	77
6-1 プログラム推進メンバー	78
6-2 メディア掲載情報	79

1 近江楽座について

1-1 近江楽座とは

滋賀県立大学の“スチューデントファーム「近江楽座」-まち・むら・くらしふれあい工舎-”は、地域に根ざし、地域に学び、地域に貢献する。」を目的とする学生主体のプロジェクトを募集、選定し、全学的に支援する教育プログラムです。

平成16年度に文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」に採択され、平成18年度までの3年間の活動実績が大学発地域貢献の先進的な取り組みとして学内外で高く評価されました。そして、翌平成19年度からは大学独自の予算を用いてプログラムを継続し、これまでに培ってきたノウハウや地域とのつながりを活かし、さらなる活動を展開しています。

教育効果を高め、大学と地域の連携を深めるための3つの目標

- 地域の課題に大学・学生が取り組み、地域の活性化に向けて共に活動する。
- 学生が地域の方々と一緒に活動することにより、学内だけでは学べないことを体験する。
- 大学と地域が共同して、よりよい地域づくりにつながるシステムをつくる。

3つのサポートシステム

近江楽座専門委員会・学生委員会・近江楽座事務局（地域づくり教育研究センター）の連携の下、3つのサポートシステムにより、全学的に活動を推進しています。

活動助成システム

“スチューデントファーム「近江楽座」”として選定されたプロジェクトの事業計画に基づき、活動に必要な事業費を審査し、助成します。

コンサルティングシステム

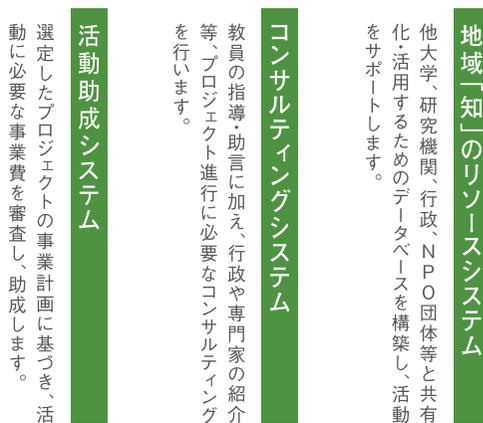
教員の指導・助言に加え、行政や専門家の紹介

など、学生がプロジェクトを進めていくために必要なコンサルティングを行います。

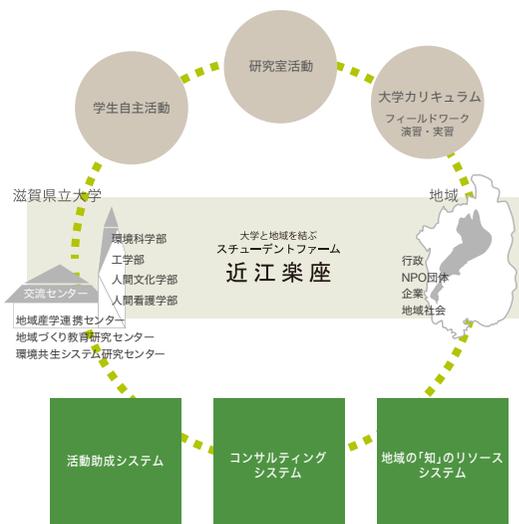
地域「知」のリソースシステム

大学と地域連携に係わる情報を他大学、研究機関、行政、NPO 団体などと共有化・活用するためのデータベースを構築し、活動をサポートします。

3つのサポートシステム



サポートシステム概念図



1-2 プロジェクト区分

2007年度より、「地域活性化への貢献」をテーマに学生主体の地域活動を行う「Aプロジェクト」に加え、新たに、自治体や企業等から提示された課題について、学生主体のプロジェクトチームを結成し活動する「Bプロジェクト」がスタートしました。

A プロジェクト

「地域活性化への貢献」をテーマとする学生主体の地域活動を募集します。

昨年度までの継続活動を対象とした①「継続プロジェクト」、新規活動を対象とした②「新規プロジェクト」、さらに平成23年度から新たに③「Sプロジェクト」として、これまでの実績をもとにステップアップを目指すプロジェクトで活動資金の助成を必要としないプロジェクト、の3つの区分で募集し、支援するプロジェクトを選定しています。

B プロジェクト

自治体や企業、団体等から依頼のあった課題について、「近江楽座」として取り組むテーマを設定し、学生主体のプロジェクトを募集します。学生チームにはテーマに対する企画提案を求め、採択されたチームは、指導教員と地域づくり教育研究センターがフォローし、依頼先と共同で取り組みます。

A プロジェクト

「地域活性化への貢献」をテーマとする学生主体の地域活動プロジェクト。

- 継続プロジェクト
- 新規プロジェクト
- Sプロジェクト（平成23年度より開始）
活動資金の助成を必要とせず、これまでの実績をもとにステップアップを目指す取り組み

B プロジェクト

学生主体のチームが自治体や企業等から提示された課題に、プロポーザル方式で企画提案を行い、選定されたチームと依頼先とが共同で取り組むプロジェクト（平成19年度より開始）

2 プロジェクトの採択について

2-1 応募件数及び採択件数

応募件数

■A プロジェクト

24 チーム

うち継続プロジェクト 18 件、新規プロジェクト 6 件

採択件数

■A プロジェクト

22 チーム

うち継続プロジェクト 17 件、新規プロジェクト 5 件

2-2 プロジェクト募集

プロジェクト募集期間

■A プロジェクト

日時：平成 22 年 4 月 12 日(月)～5 月 10 日(月)

募集説明会

■A プロジェクト

日時：平成 22 年 4 月 20 日(火)

場所：滋賀県立大学交流センター研修室 1-3

2-3 プロジェクト審査

プロジェクト審査

■A プロジェクト(公開プレゼンテーション・審査会)

・日時：平成 22 年 5 月 22 日(土)

・場所：講義室 A2-201

・内容：プレゼンテーション(プレゼンテーションシートによるプロジェクト説明)および質疑応答、審査(非公開)

・選定委員

滋賀県立大学事務局次長 堀部栄次

滋賀県立大学環境共生システム研究センター特定教授 小沢晴司

滋賀県立大学人間文化学部教授 印南比呂志

滋賀県立大学地域づくり教育研究センター特定研究員 近藤紀章

NPO法人びいめ〜る企画室代表 小川泰江

滋賀県県民活動課参事 谷口良一

採択および採択通知

■A プロジェクト

・日時：平成 22 年 5 月 27 日(木)

・内容：近江楽座ホームページおよび学生ホール 掲示板にて通知

プロジェクト説明会

■A プロジェクト

・日時：平成 22 年 6 月 1 日(火)

・場所：滋賀県立大学交流センター研修室 1-3

・内容：採択プロジェクト代表者に対する事業計画、会計処理等の進め方に関する説明会



>> 公開プレゼンテーション

1チーム4分で、自分たちのプロジェクトがどのように地域活性化に貢献できるかをプレゼン。



3 各プロジェクトの活動実績報告

01. 限界集落の村おこし	12
02. いかして民家?	14
03. とよさと快蔵プロジェクト	16
04. 菜の花エネルギー	18
05. 一姓(いっしょう)～畑に出会いの種をまこう!～	20
06. Taga-Town-Project	22
07. とよさらだプロジェクト	24
08. エコキャンパスプロジェクト木楽部会	26
09. 灯りんちゅ-リサイクルキャンドルでスローな夜を-	28
10. Shiga 食育推進プロジェクト	30
11. 荒神山ロックフェス2010	32
12. 未来看護塾	34
13. 七曲り仏壇職人にまつわる絵本作成プロジェクト	36
14. Let's 複合	38
15. 障がい児・者、自立支援・共生社会プロジェクト	40
16. ART FORUM 2010 DIG'S	42
17. 湖北 戦国プロジェクト	44
18. おとくらプロジェクト	46
19. Living design 14th FASHION SHOW	48
20. 信・楽・人 -shigaraki field gallery project-	50
21. バンデイラ・ジ・オウロ	52
22. 石山アートプロジェクト	54

次ページのデータについての補足説明

※近江楽座活動年度について ：不参加、：参加を示しています

※メンバー数は、活動に関わった学生の総です

※成果物の「楽座新聞」は近江楽座ホームページより閲覧できます

01 限界集落の村おこし

チーム名	男鬼楽座
代表者	藤吉洋輔
代表者所属	人間文化学部
メンバー数	41人（うち学生コアメンバー 27人）
指導担当教員	濱崎一志、石川慎治
活動場所	彦根市男鬼町
関係団体	—
活動概要	これまでの活動では、自然環境や地域文化財の基礎的調査と茅葺き民家の保存を行ってきました。7年目になる今年度は、集落全体に目を向けて、山村集落としての保存・活用を目指して活動しています。



チームからの活動報告

成果 - できたこと -

今年の活動で特に注目したいことは、以前から続いていた葺き替えイベントで、3年目にして屋根の平側片面の葺き替えを完了させたことです。2日間のイベントには、他大学の学生を含め20名程の一般参加がありました。片面を葺き替えたことによるメンバーの達成感は大きく、来年度以降も葺き替えイベントを継続させ、茅葺き民家の保持を行っていきたいと考えています。

課題 - できなかったこと -

様々なメディアを利用して宣伝や活動の報告を行いました。地域住民の方と直接的な関わりを持つことができませんでした。そのため、我々の活動を積極的にアピールし、元住民の方々を初めとする地域の方々と集落の保存、活用に向けて活動していきたいです。

活動を振り返って

一年を通して活動のメインが、葺き替えイベントとなっているため、男鬼町全体の保存、活用に至っていないことが課題としてあります。今年度行ったキャンプのように、新たな手法を見だし、地域の方を巻き込んでいけるような活動を展開する必要があります。

イベントに遠方から参加してくださる方や、サミットやイベントを通じて交流を深めることのできた他大学の学生など、様々な方々との繋がりが築けています。この繋がりを今後さらに強いものにするために、他大学、他団体の活動にも関わっていただけると考えています。

地域の方々とともに集落に関わり、地域とともに成長できるプロジェクトにしていきたいです。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目	チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	茅葺きイベントを行うために、事前に茅葺きについての知識を得た。イベント当日、実際に茅葺きを行い、職人さんの指導のもとに技術を習得した。
②交渉力・コミュニケーション能力	以前からお世話になっている職人さんとの交流を、さらに深めることができた。他大学の学生がイベントに参加したり、他大学のサミットに参加するなど、他大学との交流を深めることができた。
③計画力・スケジュール管理能力	メンバーにそれぞれ役割を与え、各自に行動予定表を作成した。
④企画・プロデュース力	集落活用のために、キャンプを行うなど、新しい活動を積極的に企画した。
⑤問題解決力	集落が荒らされるという問題が起きていた。今年度はそれに対し、キャンプという新たな活動の中で、集落の景観維持のために清掃活動を行った。
⑧その他	ラジオや新聞といった今まで使用していなかったメディアで学外への情報発信を行った。

02

いかして民家？

- チーム名** 古民家楽座
代表者 竹部咲希
代表者所属 人間文化学部
メンバー数 17人（うち学生コアメンバー4人）
指導担当教員 濱崎一志、石川慎治
活動場所 彦根市、多賀町、高島市
関係団体 NPO 彦根景観フォーラム
活動概要 湖東地域を中心に、古民家など伝統的建造物を再生・再評価すると共に、伝統的建造物の公開イベントや、広報媒体の充実によって、多くの人に活動を知ってもらい、地域活性化につなげたいと考えています。



チームからの活動報告

成果 - できたこと -

〔まちあるきイベント〕今年度は自分たちで計画して、まちあるきを開催できた。企画からイベント運営まで、学生中心で行い、自分たちで考え、行動することができた。地域の方々や彦根市の方々に、花しょうぶ通りの古民家の魅力を発信することができた。（白谷荘民俗調査）毎月1回のペースを維持し、教科書整理・民具調査を行うことができた。資料館再開に向け、進めている。

課題 - できなかったこと -

〔七曲がりでの調査・イベント〕花しょうぶ通りと合同で行う予定であったが、1日ではまわりきることができないと判断し、花しょうぶ通り単独でしか行えなかった。（多賀町一圓邸）イベントに参加する予定をたてていたが、古民家楽座としては全く参加することができなかった。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目	チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	まちあるきイベントをするにあたって、自分たちの知識を向上させるため、楽座内で勉強会を開いた。また、勉強した知識を、まちあるきイベントで参加者の方に発表し、発信することができた。
②交渉力・コミュニケーション能力	勉強会などで得た知識を参加者の方にどう伝えたら理解してもらえるかを考え、実践した。
③計画力・スケジュール管理能力	10月開催のまちあるきイベントのために、8月から頻りにみんなで集まり、事前に準備をできた。
④企画・プロデュース力	まちあるきイベントは、私たち学生が中心となって、企画から準備、イベント運営を行った。
⑥地域の方との人的ネットワーク	白谷荘へ毎月通い続け、地域の方の信頼を得ることができ、茅葺き屋根の保護を相談を受けた。結果茅葺き職人の招へいを手配し、ブルーシートをかけるという応急処置をすることが出来た。
⑦学内での新たな出会い・交流	地域文化学科外の学生がイベントに参加してくれ、こういった活動に興味を持ってくれる学生がいることを知れた。活動に参加したいと申し出てくれた。

活動を振り返って

もっと、地域の方との交流に力を入れた活動を行っていければと思う。地域全体の方々に、古民家保存に対する理解を深めてもらえるように、もっと広報に力を入れたり、直接地域の方にコミュニケーションをとったりして参加してもらえるよう力を入れれば良かった。私たちは年によって活動するフィールドが違うので、長い期間をかけて地域活性化に取り組めていない。私たちにとって地域活性化とは何なのか悩むが、古民家楽座は、地域活性化のきっかけを作れるような存在になれば良いのだろうかなど、自分たちのポジションを改めて考えた一年だった。

まちあるきイベントを通して、情報を発信することが大切だと実感したので、来年度はHPや古民家の魅力を伝えるパンフレットなど、いつでも見てもらえるようなものを製作し、情報発信に力を入れていきたい。

成果物／制作物



楽座新聞



まちあるきしおり

総括

指導教員から 人間文化学部 濱崎一志

まちあるきワークショップは住民同士で内部を見たことがなかった伝統的な町家を見学することができたと好評であった。伝統的建造物の調査の成果も公開し、町なみの良さを共有することができたのは大きな成果であった。

近江楽座活動年度

H16

H17

H18

H19

H20

H21

02

03

とよさと快蔵プロジェクト

チーム名	とよさと快蔵プロジェクト
代表者	北村崇之
代表者所属	環境科学部
メンバー数	30人（うち学生コアメンバー17人）
指導担当教員	迫田正美
活動場所	豊郷町
関係団体	NPO 法人とよさとまちづくり委員会
活動概要	豊郷町を拠点に古い建物を改修し活用する活動を行っています。今年度からはさらに活動の幅を広げ、(1)改修活動、(2)イベント、(3)地域資産調査、(4)研修・勉強会の4つのプロジェクトから豊郷町のまちづくりを行っていきます。



チームからの活動報告

成果 - できたこと -

今年度は調査、研修という新たな試みを取り入れたことにより、快蔵Pとしての活動の幅が広がったように思う。また、月例会の導入による全学年内での情報の共有や、活動の成果を豊郷町の町の人に向けて発信するなど情報をどのように扱うかについて目を向けられたことが大きかった。

課題 - できなかったこと -

活動の幅を広げ、町内外の人に広く活動を知ってもらおうと努めたが、目的とする人たちにうまく情報が届いていないということを感じた。町ごとの特徴を考え、広報の仕方については今後模索していきたい。

活動を振り返って

例年の活動の中心軸である「改修」、「イベント」に、今年度は「調査研修」を加え、3つの軸で幅広く活動を行った。「改修」では、同じフィールドで活動するとよさらだプロジェクトから依頼された道具小屋を製作。町の人との交流や同プロジェクトと豊郷町について考えていくきっかけを得られたのが大きい。また、近江楽座内のプロジェクト同士のつながりについて新たな可能性があるのではないかと感じた。今年度から、活動の中心に取り入れた町内の地域資産調査・他事例の研修では、今後、新たな提案活動を行うとともに、町の人にまちづくりについて、関心をもってもらえるようなイベントも行っていく予定。

課題として、活動の積み重ねが情報として蓄積されていない、情報の共有が不十分であったため、定例会議を行い、全体で情報共有を行うことに加えて、改修やイベント等の企画・運営を行う際には必ず書類をつくり、データとして蓄積することを徹底した。また、活動が、町内外に広く認知されるよう、広報にもっと力を入れていきたい。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目	チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	①③④⑥⑦とよさらだプロジェクト道具小屋づくりは新築での作業で、今後の活動に活かせるであろう技術的な情報の蓄積に繋がった。また、同じフィールドで活動するプロジェクト同士で豊郷町を考えるきっかけにもなった。【改修班】
②交渉力・コミュニケーション能力	
③計画力・スケジュール管理能力	②③④⑥⑦子どもたちをターゲットにワークショップ・どろんこまつりを企画。まちの親子の人たちとの交流につながった。【イベント班】
④企画・プロデュース力	②⑤⑥NPO 法人尾道空き家再生プロジェクトとの交流・意見交換、ワークショップへの参加により、違うフィールドで活動する団体としてお互い刺激し合えた。また、豊郷町で何ができるのか、再認識できる機会となった。【研修班】
⑤問題解決力	
⑥地域の方との人的ネットワーク	②③④⑤⑥豊郷町の蔵・古民家にて合宿を行いながら、町内の地域資産調査を行った。合宿最終日には町の人に向けて発表会を企画し、年間の活動や町についての意見交換を行った。また、改修予定の古民家（前田邸）を、今後どのように改修・活用していくのかを町の人とともに考えることができた。子どもから高齢の方まで幅広い人に訪れてもらい、交流をはかることが出来た。【全体】
⑦学内での新たな出会い・交流	

成果物／制作物



楽座新聞



どろんこまつりチラス



古民家再生塾チラス

総括

指導教員から（抜粋） 環境科学部 迫田正美

本年度はこれまでの活動の継承と新たな方向性を探る年となった。まず、活動の体制を改修・イベント・調査研修・広報・タルタルーガの5つの班に分け、それぞれの班にリーダーをおき、M1 あるいは上級生と1 回生がサポートする体制をつくることで、これまでの活動の引継ぎ・継承を図るとともに、それぞれの班で活動計画と予算積算、実行計画を独自に計画しながら、月1 回の月例会で各班の方針と活動報告、今後の方針など、情報をオープンにして共有することで、すべてのメンバーが自分で考え、相談し、決定して行動することのできるチームを目指したことは、今後の活動に向けた大きな一歩となったように思う。

年度後半は来年度に予定している、旧前田邸の改修に向けたプロジェクトに全員で取り組んだ。その中で、豊郷町についてもっと知りたい、という強い意識が生まれ、町歩きとマップ作りのワークショップなどを含む三日間の合宿を行い、その成果と合わせて、旧前田邸でのオープンハウスイベントを2 週間に渡って開催することとなり、イベントなどを通じて地元の子供たちやお年寄りの方々と顔の見える交流ができたことは収穫であった。

今年は創設期のメンバーがほぼ卒業してしまうことになり、来年度は更に大きな転換期となると思われる。改めて豊郷町の人たちとの関係を深めること、また自分たちの時代の自分たちらしい活動のあり方を見つけ出して、更なる展開を期待したい。

近江楽座活動年度

H16

H17

H18

H19

H20

H21

03

○ 4 菜の花エネルギー

チーム名 菜の花エネルギー
代表者 熊澤直人
代表者所属 工学研究科
メンバー数 17人（うち学生コアメンバー5人）
指導担当教員 山根浩二、河崎澄、近藤千尋
活動場所 学内
関係団体 菜の花プロジェクトネットワーク
活動概要 菜種を栽培しバイオディーゼル燃料を作ったり、小学生や高校生を対象としたエネルギー教育講座を積極的に行いながら、資源循環型社会の知識やその重要性を地域の方へ伝え、ともに学ぶ事をめざしています。



チームからの活動報告

成果 - できたこと -

菜の花栽培は収穫、選別、播種、追肥等を計画通り行うことができた。また搾油量は昨年度を上回ることができた。小学校出前授業は予定通り年間2校訪問することができた。授業内容は昨年度よりもより分かりやすくすることを心がけ、好評だった。

滋賀大学での燃料づくりにチャレンジし、他大学にも環境やエネルギーについて意識を高めてもらうことができた。

課題 - できなかったこと -

搾油を外部に委託する予定であったが、時間がかかるため本チームが所有する搾油機で行った。その結果菜種油の質が悪くなり、予定していた農家との天ぷら会を行うことができなかった。

滋賀大学での燃料づくりは来客が少なく不十分な内容となった。他大学での活動ということもあり、PR不足であった。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目	チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	実験教材の多彩化を図るため、「フンポンゴマ発電機」を新たに製作した。発電自体は可能であるが、発電には技術が必要とされるため小学生等子供向けの教材としては失敗に終わった。小学生の立場を考慮しながら教材を設計し、製作する機会となった。
②交渉力・コミュニケーション能力	小学校出前授業を行う際、事前に小学校を訪問し、授業の内容説明、日時の設定などを小学校の先生方に行った。また授業においても、相手を考えた話し方、説明などのプレゼンテーション能力が得られた。
③計画力・スケジュール管理能力	菜の花栽培は植物を相手にした活動であるため、年間を通した計画が重要であり、スケジュール管理をする能力を身につけることができた。
④企画・プロデュース力	城北小学校への訪問を新たに企画し、授業の内容説明、日時の設定などを同校の教頭先生に行った。目新しい企画ではないが、前年度の成果を生かした企画を行うことができた。
⑥地域の方との人的ネットワーク	子ども用の足こぎ発電機を製作する際、オルタネーター（発電機）が上手く起動せず、湖風祭当日も故障などが起きたが、交流を直流に変換する部分のダイオードを交換するなど、チームのメンバーで協力して解決することができた。
⑦学内での新たな出会い・交流	びわ湖毎日マラソン環境キャンペーンに出展した際に、他の参加チームの中で農業を推進する団体と話をする機会があり、意見を共有することができた。

活動を振り返って

4年間に渡って続けられてきた休耕田を利用した菜の花栽培は、昨年度の収穫量を大きく上回り、菜種油は8リットル搾油することができました。これは種の播き方や畝の作り方を改良した成果であると考えられ、作業に手を貸していただいた農家の方々のおかげであると思います。一方で菜の花栽培活動に関しては農家に協力してもらって中、天ぷら会などのイベントができていないため、課題点を残していると思います。

昨年度から始まった小学校出前授業は今年度も引き続き行われ、訪問する小学校をさらに1校増やすことができました。この活動は小学生に環境やエネルギーについて興味・関心を持ってもらうことが目的であり、十分に成果が得られたと思います。

これらのことを踏まえ、今後も資源循環型社会の形成を目指し、地域に貢献できる活動を続けていきたいと思っています。

成果物／制作物



楽座新聞



ブンブンゴマ発電機



菜種油

総括

指導教員から (抜粋) 工学部 山根浩二 河崎澄 近藤千尋

(山根浩二)

小学校への出前講義を、さらに1校増やし、子ども達にも好評で、新聞にも取材されるなど、収穫は多かったと思う。新たな試みとして滋賀大学の学生チームとも連携して行われた学祭での燃料作りは、来客が少なく、PR不足など集客を行うための課題も見えたと思う。今後は、菜の花エネルギーチームを持続させてゆくためには、好評であった内容だけに集中しても良いと思う。

(河崎澄)

小学生を対象とした“楽しい”環境学習イベントを、積極的に多数展開している。回を重ねる度に、内容も充実してきており、評価が高い。今後も発展・継続されることを期待している。

今後の課題は、菜種の栽培活動の意義と目的を明確にすることであると思われる。

(近藤千尋)

年間を通じて多様な活動を計画的に良く行っている。これは、地域の方との連携を上手く行えていることや、当人らの活動に対する真摯な姿勢によるものであり、今後も継続してほしい点である。小学校出前授業での劇や「手のひら発電」は、小学生にわかりやすくかつ興味をもってもらえるように最近の話題を取り入れる等の工夫・改善がされ、実習目標の一つであるPDCAサイクルもできつつあるのではないかと感じる。今後の活動のいっそうの充実を期待している。

近江楽座活動年度

H16

H17

H18

H19

H20

H21

04

05

一姓（いっしょう）

～畑に出会いの種をまこう！～

チーム名	一姓
代表者	丸山園加
代表者所属	環境科学部
メンバー数	13人（うち学生コアメンバー4人）
指導担当教員	近藤隆二郎
活動場所	彦根市
関係団体	西村農園
活動概要	畑作業によって、世代や立場を超えたたくさんの人をつなげて地域を元気にし、農業の楽しさ、大変さ、野菜の大切さ、食の重要性を学んでいます。そして、農を通じて地域活性と若い世代の活性をめざしています。



チームからの活動報告

成果 - できたこと -

昨年は、一姓畑を拠点に、地域のお年寄りや、集落の子どもたちと交流することで、畑作業によって地域を元気にすることが出来た。

課題 - できなかったこと -

畑づくりを焦点に当てつつ、チーム作りを行ったため、外部に向けてのイベントが行うことが出来なかった。開出今集落の子どもたちとのイモ掘り体験を通は、通年のイベントを行う方が良と考えられた。

活動を振り返って

1年間チームとしての基盤作りに焦点を当てて活動を実施した。その結果、畑作業を中心としたため内部での活動が多かった。しかし、数多くのイベントに参

加し、地域の方々や、外部の方々との交流も行った。こうしたイベントにメンバーほとんどが参加し、畑作業を年間通して共にする中で、チームワークを向上させていった。また発足してから2年が経ち、畑作業に何回も通うことで、近所の人々に打ち解けることが出来るようになった。課題として残ったことは、地域の子もたちとの交流イベントを行ったが、単発で終わってしまったことである。苗植えから収穫、そして食す、という工程を行うことによって、より深い関わりが可能になるのではないかと。

今後の展開・展望としては、まず、野菜の出来をよくして、学内での野菜販売を再開することがある。メンバーが野菜作りの知識を共有して共同作業日を増やすことで野菜の手入れ・管理をより一層極めていきたい。また、コンパニオンプランツを来年度も採択することで環境にも配慮した野菜作りを進めていきたい。

来年度は「出会いの花を咲かせよう！」というキャッチコピーのもと、多くの人に農の素晴らしさを伝えていきたい。そして、感謝の気持ちを込め、お世話になっている方々に恩返しもしていきたい。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目	チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	畑作業をする中で、先輩から後輩、地域のお年寄りから学生というように、農業におけるポイント、コツなどを教わり、チーム全体で知識を得ることができた。
②交渉力・コミュニケーション能力	日々の作業において、地域の住民の方との日常的な会話の中で、また、外部と関わるイベントにおいて、互いに行っていることを話し合い、良い刺激をもらうなどしてコミュニケーション力を養っていった。
⑤問題解決力	今年度は、野菜作りがうまくいかなかったが、なぜうまくいかなかったのかを、チームで反省し、そして改善し、新たな策を実行できた。
⑥地域の方との人的ネットワーク	一姓畑での作業を開始して2年目ということもあり、何度も畑作業に行く中で住民の方と密に関わりあうことが出来、互いに信頼関係を築き上げることが出来た。

成果物／制作物



楽座新聞

総括

指導教員から 環境科学部 近藤隆二郎

なかなかうまく作物が出来なかったり、水やり当番がうまくいかなかったり、野菜をつくるということの大変さを自ら体験していました。畑を媒介として地域の方々と触れ合う場の形成が出来、さらには他大学生も含めた交流も出来ていたように思います。また、代替わりもスムーズで、組織としては、良い感じになってきたと思います。ただ、「野菜を作る」とことと地域との関係、さらには何を指すのかといった点がまだあいまいな気がします。そこは今後作りあげてを期待しています。

チーム名	Taga-Town-Project
代表者	大橋弘明
代表者所属	環境科学部
メンバー数	17人（うち学生コアメンバー16人）
指導担当教員	山根周 松岡拓公雄
活動場所	多賀町
関係団体	—
活動概要	多賀町の魅力を発見し・発信していくことを目的に『暮らし図鑑プロジェクト』、『色人図鑑プロジェクト』、等の個性的なプロジェクトを展開します。さらに今年度は、まちの方や学生が気軽に集まれる拠点づくりも行っています。



チームからの活動報告

成果 - できたこと -

くらし図鑑の本体を作り、もんぜん亭に設置させていただけたことにより、自分たちで作った記事を町の人たちにも読んで頂けるようになった。くらし図鑑のインタビュー記事2種類「くらし図鑑について」と「万灯祭について」を発行することが出来た。改修の仕方を自分たちで調べ、実行することが出来た。

課題 - できなかったこと -

山菜プロジェクトで「里の駅」に参加を決めていたが、参加意義が見出せなくなり参加することがなくなってしまった。今後は意義やプロジェクトを根本から見直していきたい。八百秀アパートを運営するまでの段階まで進められなかった。企画力・計画力の不足が原因だったと思われる。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目	チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	報告書やインタビューの記事づくりなどによるイラストレーターの技術。アパートの改修時に行った実測・壁塗り・床張り・床塗り・天井塗りの技術。
②交渉力・コミュニケーション能力	インタビューやまちの忘年会に参加することで、まちの人々と話す機会を得た。インタビューなどの時、事前に会う日を決めたり、手紙で添削をお願いしたりした。
④企画・プロデュース力	イベントの企画をたて、実行する力が身に付いた。
⑤問題解決力	問題について書き出し、どうすればいいのかメンバーみんなで話し合った。
⑥地域の方との人的ネットワーク	インタビューを行ったり、地域のお祭りに参加した。まちの人たちの忘年会に参加したり、共栄会の研修旅行に参加した。
⑧その他	中間報告会や金沢大学との意見交流会に参加した。

活動を振り返って

今年度からはまちの人から多賀町にある八百秀アパートを一室借りられることになった。当初は学生が住めるようなプランを進めていたが、実現が難しいことがわかった。そこで、「誰でも使えるギャラリー・イベントスペース」(案)を進めることになった。3月現在で床、壁、天井の改修が終わっているが、大きなイベントやギャラリーを行うにはまだ不十分と思われる。メンバーが改修に対して知識を持っておらず、作業計画の組み方が適切でなかったことも原因の一つである。今後は「活動を続けていく目的」と「自分たちのやりたいこと」を照らしあわせ、実行するべきかどうか吟味して作業していきたい。

活動の軸としていた「くらし図鑑」の制作については、記事の発行が4カ月に一度程度になった。今年度でノウハウをつかみつつあるので来年度からは、もっと発行回数を増やしていきたい。また、多くのプロジェクトを同時進行させての活動であるため、TTP全体をしっかりと見ながら活動を深めていきたい。

成果物／制作物



楽座新聞



多賀暮らし図鑑



色人図鑑 col.3

総括

指導教員から (抜粋) 人間文化学部 山根周

色人図鑑、八百秀アパートの拠点作りなど、今年度は新たな活動の方向性が見え、それを継続することができた年であったと思います。また活動を随時ブログで発信し続けたことで、活動内容もよく分かるようになりました。

一方で、これは当初からの課題であると思いますが、町のニーズをメンバーがどのように捉え、それに対してどのような解決や提案を行っているかという点についてはどうでしょうか。地域住民との接点や、活動のまちへの浸透という意味でも、自分たちはまちにとって何をやっているのかという活動の位置づけ、意義付けは常に意識し、考えておかなければならないと思います。

八百秀アパートは、TTP の拠点としてだけでなく、まちの方々も利用できる古本ライブラリーとしての活用も考えているようなので、上記の意味での方向性もある程度明確になりつつあるのだと期待しています。がんばってください。事務局へも一つ要望があります。上記のまちでの拠点や地域交流の場所づくりを支えるために、空間の使用に関する費用（具体的には賃料）を支出できるようにしていただきたいと思います。

07

とよさらだプロジェクト

チーム名	とよさらだプロジェクト
代表者	湯谷智
代表者所属	環境科学部
メンバー数	14人（うち学生コアメンバー1人）
指導担当教員	増田佳昭
活動場所	豊郷町
関係団体	NPO 法人とよさとまちづくり委員会
活動概要	豊郷町の畑で学生が中心となってさまざまな無農薬野菜の栽培を行い、収穫した作物は大学生協へ納入しています。今年度は、地域のお祭りや朝市への参加により、積極的な地域参加をめざしています。



チームからの活動報告

成果 - できたこと -

大学生協にて、前期・後期共にとよさらだの野菜を出荷・販売できたこと。色々な方とコミュニケーションをとり、様々なイベントに参加できたこと。彦根市の朝市や直売所など、とよさらだの活動の場を増やせたこと。

課題 - できなかったこと -

活動の場が増えたが、人手不足である。そのため作業が行えない日もあり、生協へ野菜の出荷が出来ない日もあった。また収穫時期を逃し、出荷できない野菜なども発生してしまった。地域の方と共に作業を行う機会が少なかったこと。

活動を振り返って

本年度は県立大学の生協、彦根の直売所、朝市と様々な場所で、とよさらだの野菜を出荷・販売しました。この成果は、今後の活動展開に向けて大事な起点となりました。

とよさらだの展望は二つあり、一つは豊郷町にて野菜を販売し、豊郷町をPRして地域の活性化につなげることで、もうひとつは、とよさらだの野菜市を開くことによって地域の人々が集まり、そこから人との交流が生まれ、その地域での活性を引き起こすことです。そのため来年度は本年度の成果を継続させ、更に美味しい野菜作りと、本年度では人手が足りず、出荷できない日や販売する野菜が少なく、買いに来た人を残念な思いにさせることがあったので、安定した出荷・販売のための人手の確保が課題です。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目	チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	野菜の栽培方法など、地域の方からのアドバイスを受け実際に栽培することによって身につけることが出来た。6月には滋賀県湖東農業農村振興事務局の方に来ていただきトマトの誘引に関するアドバイスをいただいた。
②交渉力・コミュニケーション能力	彦根市の朝市や直売所に出店するため役場の方やJAの方と手続きを行った。また朝市にて、とよさらだの野菜を買っていただいた方とのコミュニケーションも出来るだけ欠かさず、アドバイスや注意点をいただき、中には毎月とよさらだの野菜を買ってくださる方もいた。
③計画力・スケジュール管理能力	今年は様々なイベントに参加し、そのイベントに間に合うよう作業を進めることが出来た。去年は栽培に失敗した白菜を今年は計画を立てて栽培を行い、出荷・販売することが出来た。
⑤問題解決力	今年は多くの場所でとよさらだで栽培した野菜を販売した。そのため野菜の包装や価格、売れるための工夫などメンバー内で意見を交えながら進めていった。
⑥地域の方との人的ネットワーク	地域の農家の方や役場の方とのコミュニケーションにより、豊郷町で行っているイベントにスタッフとして参加させていただいた。湖風祭の時には野菜やお米を持ってきてくださり、調理の手伝いもしていただいた。
⑧その他	今年は近江楽座の「とよさと快蔵プロジェクト」と共同でとよさらだの倉庫づくりを行った。また近江楽座「おとくらプロジェクト」さんが運営している喫茶おとくらにて同じく近江楽座「一姓」と共に野菜を販売させていただいた。

成果物／制作物



楽座新聞

総括

指導教員から(抜粋) 環境科学部 増田佳昭

足かけ 3 年を迎え、活動も定着してきたし、課題も見えてきたのではないかと。成果としては、一つは継続が出来ていること。作物を栽培することは持続性が必要である。いろいろな障害があったはずだが、メンバー諸君があきらめず、あせらず、活動を継続できていることは何よりも評価したい。もう一つは、各地の直売への参加など、ネットワークが広がってきたことだ。JA 加入をめぐっては、社会の仕組みの複雑さに当惑したものと思われる。そうした地域社会の諸関係との関わりもプロジェクト活動の重要な側面である。

今後の課題としては、プロジェクトの目標をどこに置くかであろう。できることなら、大学生協食堂に納品する野菜の目標額を決めてもらいたいと思うし、時期別の納品計画も作成してもらいたい。単なる趣味のサークルでなく、一定の社会的な役割を持った活動をしてもらいたいと思う。それなりの収支計画も必要だろう。要望としては過大かもしれないが、まねごとでもいから、「経営」と考えて、必要なことをやってみてはどうだろうか。趣味のサークルか、社会的な役割を果たすサークルか、メンバーの間で議論してみてもどうだろうか。

08

エコキャンパスプロジェクト

木楽部会

- チーム名** エコキャンパスプロジェクト木楽部会
- 代表者** 一浦皓治郎
- 代表者所属** 環境科学部
- メンバー数** 9人（うち学生コアメンバー2人）
- 指導担当教員** 松岡拓公雄
- 活動場所** 滋賀県立大学内「もくれん」
- 関係団体** 親子ものづくり塾クラフトキッズ
- 活動概要** 地域へ入って活動を行い「木楽ブランド」の確立をめざすことで、こだわりのあるものづくりを伝えていきたいと考えています。その活動を通して、「地域から学び地域へ伝える」ことを実践してきます。



チームからの活動報告

成果 - できたこと -

(1) ワークショップ（城西小学校、クラフトキッズ）、(2) 制作（おままごとキッチン、ベンチ）、(3) 技術・知識向上（造形活動、工場見学）、これら3つを柱にして活動を進めてきた。制作を依頼して下さった方と話し合っ、どういう物にしたいのかなど決めていくことができ、学生でありながら社会と交わることが出来たこと。また子どもたちに、どうすれば分かりやすく、うまく伝わるかなど、試行錯誤することもコミュニケーション能力を磨くことになったこと。実際に自分たちの手や頭を使ってものづくりをする事で、機会の使い方や自然素材の知識などが自然に身についたこと、等がよかった点である。

課題 - できなかったこと -

制作活動の2件は、年内完成予定だったが、メンバー

の予定や、機械を揃えることが出来ず、完成に至らなかった。“納期を守る事”、“部員の意識を高める事”、“後継者育成”が課題である。

活動を振り返って

今後の展望として、次の2項目を上げる。

(1) 規模の縮小

今年度は、完成に至らなかった制作物があった。活動の幅の広さにより部員のキャパシティを上回る仕事量が発生したことが原因ではないかと考えられる。この経験を生かして、規模の縮小も考慮に入れ、部員のキャパシティとバランスを見ながら、仕事量の調整をしなければならないと考える。

(2) もくれんの管理

今年度、もくれん内で怪我人が発生する事故が起きた。今までの管理の体制を見直し、規約を執行していくことが必要である。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目	チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	実際に自分達の手や頭を使ってものづくりをする事で、機械の使い方や自然素材の知識などが自然に身に付いた。
②交渉力・コミュニケーション能力	制作を依頼してきて下さった方と、一緒に話し合っ、どう物にしたいのかなど決めていく事が出来、学生でありながら、社会と交わる事が出来る。また、子ども相手にどうすれば分かりやすく、上手く伝わるのかなど、試行錯誤する事もコミュニケーション能力を磨く事になった。
⑥地域の方との人的ネットワーク	ワークショップや制作など、さまざまな依頼者との幅広いつながりを持つ事が出来た。
⑦学内での新たな出会い・交流	学内の近江楽座の他団体の方との出会いがある。ベンチ制作では廃棄物バスターズさんと知り合う事が出来た。

成果物／制作物



楽座新聞



ポストカード

総括

指導教員から(抜粋) 環境科学部 松岡拓公雄

間伐材の利用や木材利用の見直しは年々強まっている。木楽部会は、身近にもっと木に触れようということで拠点を設け、地域にまでその活動を展開して来た。拠点・モクレンの内装工事作業や他の団体の使用のために工作機械などの管理を日常の活動とし、木を使ったものづくりを広く知ってもらうために、ワークショップやものづくり教室などを開き、同時に依頼制作活動も続けている。今年度は作業中に怪我人を出してしまった事や依頼制作が遅れてしまった事は残念だが、今後の管理体制を見直すことで避けていくようにしたい。私や財務グループの管理も含めて、新たなモクレン使用規約をつくる事が求められていると感じる。

サンキコーや城西小学校など地域の活動に参加出来た事は評価できる。今後は木の一生を通した範囲の活動、森林体験から廃材活用までのことも視野に入ると、地域との関わりにも、新たな展開が生まれると考えている。後輩を育てながら活動を継続してほしい。

近江楽座活動年度

H16

H17

H18

H19

H20

H21

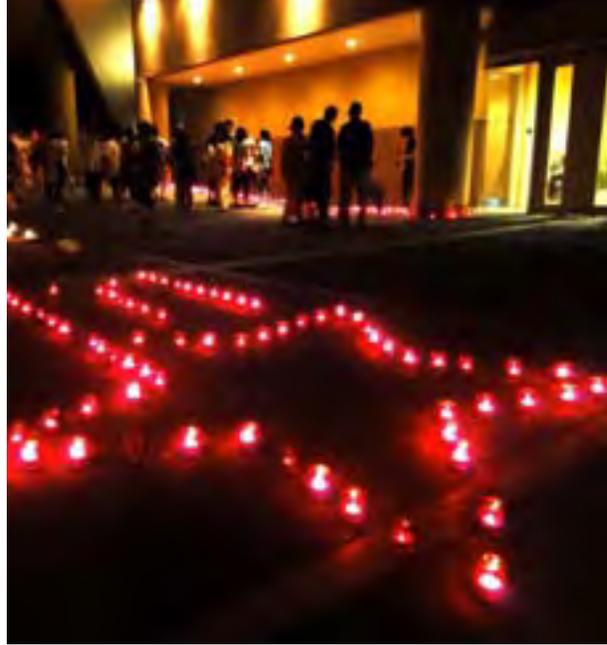




灯りんちゅ

- リサイクルキャンドルでスローな夜を -

チーム名	あかりんちゅ
代表者	本間友香里
代表者所属	環境科学部
メンバー数	11人（うち学生コアメンバー11人）
指導担当教員	近藤隆二郎
活動場所	彦根市内、滋賀県内
関係団体	ひこねキャンドルナイト実行委員会
活動概要	お寺の廃棄ろうそくを使って子どもたち向けにキャンドルづくりの教室を開いたり、スローな夜の過ごし方を伝えるキャンドルナイトを行っています。今年度は新たに「灯り × 音楽」にも挑戦していきます。



チームからの活動報告

成果 - できたこと -

病院でキャンドルナイトを行えたのは、大きな成果である。入院している患者さんや看護師・医師の方にも喜んでいただけ、「癒しの時間」が提供出来た。また、ハンドベル演奏に挑戦出来たことは、あかりんちゅのキャンドルナイトに新たな付加価値を与え、一歩前進に繋がった。キャンドル作り教室は前年度と同じところで行い、より繋がりを深めることが出来た。

課題 - できなかったこと -

ひこねキャンドルナイトで使用されるキャンドルの一部をリサイクルキャンドルに変えるということが出来なかった。またあかりんちゅ以外のキャンドルナイトを訪れ、配置を参考にするといったことがあまり出来なかった。商品販売の方も単発のイベントでしか販売を行うことが出来なかった。

活動を振り返って

学校、病院、東京と様々な場所でキャンドルナイトを開催することができ、成長を感じることができた。病院でのキャンドルナイトでは入院患者や看護師といった「本当に癒しを必要としている人達」にキャンドルナイトという時間と空間を提供し、予想以上に見に来ていただいた方に喜んでもらうことができ、やりがいと満足を感じることができた。また、メディアに注目して頂く機会が多く、それがきっかけで繋がりが広がっていった。注目してもらった分、今の自分達の活動に満足せず、今まで行ってきたことをより深め、そして新たなことに挑戦していくことが必要である。

活動開始から3年目の来年度は、あかりんちゅの原点である「キャンドルナイト」を活動の中心に置き、より地域に密着した形でのイベントを目指す。そして、「伝え方・見せ方」の部分工夫し、強化していくことを目指す。また、リサイクルキャンドルの売り上げや出張キャンドルナイト・キャンドル作り教室等から収入を得られるような体制を整えていく。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目	チームとして得られたスキルの具体的事例
②交渉力・コミュニケーション能力	メディア取材や「ボランティアの集い」等、企業の方と接する機会が多かったため、地域の方とは違った緊張感を持ちながら、コミュニケーションを取っていく能力を得ることが出来た。
⑥地域の方との人的ネットワーク	彦根市立図書館でハンドベル演奏をしたり、株式会社彩生舎にアロマキャンドルレシピを提供したりと、今年度行った活動により、人的ネットワークを昨年よりも広げることが出来た。

成果物／制作物



楽座新聞



ポストカード

総括

指導教員から 環境科学部 近藤隆二郎

徐々に後輩も増えて組織が充実した一年でした。また初代 7 名が就活などで時間が無くなる中、後輩への引き渡しもできそうでした。五環生活と環境省との協働によるリサイクルキャンドル事業にも参画することで、さまざまなつながりの中であかりんちゅの立ち位置を改めて見直すことが出来たのではないのでしょうか。今後も、ゆるぎない目標の芯を主軸としながら、遊び楽しさ美しさも加えたあかりエンターテインメントのプロへ脱皮して欲しいと願っています。

10 Shiga 食育推進プロジェクト

チーム名	県大地域食育推進隊
代表者	石川望未
代表者所属	人間文化学部
メンバー数	31人（うち学生コアメンバー7人）
指導担当教員	岡本秀己、佐々木一泰
活動場所	彦根市内
関係団体	彦根市福祉保健部健康推進課
活動概要	“食育”とは、食に関する知識、それを実践していく力を身につける教育。この“食育”をプロジェクトのテーマとし、大学・地域・行政が三位一体となった斬新な食育活動モデルを提案・発信し、地域の活性化をめざしています。



チームからの活動報告

成果 - できたこと -

今年度たちあげたばかりのプロジェクトだが、当初の計画よりもたくさんの活動を行うことができた。「NAKANIWA CAFÉ」や「特別支援学級児を対象にしたクリスマスパーティー」では、自分達を中心となって企画や媒体の制作を行い、他のゼミや1、3年生にも手伝ってもらいながら実施することができた。また、「『旬』を満喫 白菜収穫体験&親子料理教室」では、サポートだけではなく食育啓発活動を行うこともできた。

課題 - できなかったこと -

移動式かまどの製作が実現できなかった。計画にはなかったイベントが増えたり、参加はできなかったイベントもあり、計画通りに活動することができなかった。また、コアメンバーが今年度で卒業するので、来年度は一から活動を始める体制になってしまう。

活動を振り返って

さまざまな団体と連携して数多くの食育推進活動を行うことができた。学生が食育事業に参加・支援したことに対し、各団体からは非常に好評な意見をいただき、学生にとっても食育の現場は学びの場であった。

食育事業に参加することで、「指導もできるようにになりたい」という意見が出るなど学習意欲の向上につながり、また、自分たちで一から食育プログラムづくりを行うことで企画する能力なども身についた。生活デザイン学科の学生にとっても、関係者とのコミュニケーションを図り、改良を重ねることでよりよいものをデザインする技術が身についた。

来年度は、まずプロジェクトのメンバーを確保し、活動を組織的に行えるようにしていく。また、食育をより効果的に行うために、ツール作りやプロジェクトのメンバーのスキルアップを行う。さらに積極的に食育事業に参加し、本プロジェクトをアピールしていく。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目	チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	自分たちがデザインしたものを食育事業で実際に使用し、他の学科の学生、各団体の人たちから意見を聞き、改良を重ねることでよりよいものをデザインする技術が身についた。
②交渉力・コミュニケーション能力	活動を行うのに必要な物品を購入する際に、事務局の方たちと話しあったことで、交渉力・コミュニケーション能力が向上した。またロゴマークやツールについての意見を交換したので、お互いにコミュニケーション能力が向上した。
③計画力・スケジュール管理能力	他のイベントと実施時期が重ならず、準備期間がとれるように生協と日程を調整するなどスケジュールを管理する能力が身についた。
④企画・プロデュース力	「特別支援学級児を対象にしたクリスマスパーティー」では、特別支援学級児の特性に配慮したプログラム・媒体作りを一から自分達で行ったことで、イベントを企画する能力が向上した。
⑥地域の方との人的ネットワーク	「元気フェスタ 2010」では、滋賀県立大学の看板やロゴ入りのエプロンがあったことで、卒業生や地域の方たちに声をかけていただき、交流することができた。また、平和堂だけではなく他の団体の人たちとも連携して活動を行うことができ、ネットワークが広がった。
⑦学内での新たな出会い・交流	「NAKANIWA CAFÉ」や「環びわ湖大学地域交流フェスタ 2010」に参加したことで、他の学科やプロジェクトの人たちと交流することができた。
⑧その他（学習意欲の向上）	「NAKANIWA CAFÉ」では骨密度や体組成の測定だけではなく、「説明もできるようにになりたい」という意見が出るなど学生の学習意欲が向上した。また、「NAKANIWA CAFÉ」や「SADAY スーパーマーケット食育体験」では栄養士の仕事を間近に見ることができ、大学の授業だけでは学べない食育の現場を知ることができた。

成果物／制作物



楽座新聞



『旬』を満喫 白菜収穫体験&親子料理教室
配布資料

総括

指導教員から(抜粋) 人間文化学部 岡本秀己

本プロジェクトは、これまで人間文化学部生活栄養学科の学生が本学学生の骨密度を測定したり、地域の高齢者の健康教室をやってきたなかで、行政、栄養・食料・小売り・学校など関連の各種団体と大学が三位一体となり、地域の健康増進を進める必要があることを痛感し、効果のある食育推進を行うためには「組織」が必要であると考え、結成されました。

今年は彦根市健康増進課「ひこね食育推進委員会」の委員が所属する各種団体との交流を含め、学内、彦根市の小学校、彦根市民を対象に数々の活動を行いました。近江楽座からの活動資金を得て、様々な食育推進を効果的に進めるツール、ポスター、エプロンなども整い、ここでは生活デザイン学科の学生が大いにその力を発揮してくれました。また、「食育推進隊」はこれから社会に出ていく学生にとっても、管理栄養士やデザイナーとして、実際の活動を通して、大きな勉強の場となる機会でもありました。

学生たちが頑張った成果は、一般社団法人環びわ湖大学・地域コンソーシアムから「活動奨励賞」をいただき、今後の活動を行っていくうえで大きな力となりました。

近江楽座活動年度

H16

H17

H18

H19

H20

H21

10

11 荒神山ロックフェス 2010

チーム名	荒神山ロックフェス実行委員会
代表者	三輪卓也
代表者所属	人間文化学部
メンバー数	13人（うち学生コアメンバー13人）
指導担当教員	島村一平
活動場所	彦根市内
関係団体	高藤組、芸や
活動概要	2002年より滋賀県立大学を会場として開催している学生主体の音楽イベントです。今年はスローガンを「飛躍」とし、彦根から「音楽」と「地域」の輪を広げていくことをめざしています。



チームからの活動報告

成果 - できたこと -

会議を綿密に行い、今後の見通しをしっかりと立てることができた。今年度は特に広報活動に力を注いだ。彦根市内だけでなく、近隣地域や県外にも宣伝のチラシを配布した。活動期間より前（6月以前）に、花しょうぶ商店街のイベントにボランティアとして参加できた。

課題 - できなかったこと -

市内の清掃活動が悪天候の為中止となってしまう。その後の日程の関係で、振り替えて行うことができなかった。

活動を振り返って

荒神山ロックフェス（KJRF）は、毎年滋賀県立大学で開催されている学生主体の音楽イベントです。9回目を迎える今年は、更なる躍進と発展のために力を注ぎました。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目	チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	特に音響・照明・会場部署は、事前に講習会などを行い、自分が仕事をするうえで必要な知識を身に付けることができた。
②交渉力・コミュニケーション能力	宣伝チラシやポスターを店舗等においてもらう際のお願いの仕方や対応を学べた。
③計画力・スケジュール管理能力	長期の計画を的確に立てる力を養えた。また、いつまでにどのようなことをすべきなのか一人ひとりが能動的に考えることができるようになった。
④企画・プロデュース力	この項目が当イベントで最も重要になった。学生だけの運営でいかに予算をかけずによりよいモノを作れるかという所が最も思案したところである。
⑤問題解決力	トラブルに対する対応や、雨天時の対応など、細かいところまでシミュレーションしながら、どんな問題にも対応できるようにした。
⑥地域の方との人的ネットワーク	彦根市の高藤組さんや多賀町の芸やさんとの繋がりがあげられる。こちらは会場設営に必要な物品を貸していただき、その代わりにそれらの団体のイベントのお手伝いやボランティアをした。
⑦学内での新たな出会い・交流	一緒に仕事をしたり、活動全体を通じて先輩・後輩の関係の枠を超え、多くの仲間ができた。
⑧その他（学外の人との出会い）	学生では長浜バイオ大学や立命館大学、同志社大学からの参加も多くあった。また遠方からの参加者もあり、非常に大きなスケールでの人との交流ができたと考えている。

まずフェスそのものの質の向上を図りました。学生イベントであるが故の「クオリティの至らなさ」や、「内輪だけの盛り上がり」というイメージを払拭しようと細部にまで気を配りました。さらに広報活動に力を入れ、より多くの方にKJRFを知ってもらおうと努めました。その結果、応募バンド数も例年より大幅に増加し、8月21日、22日二日間の集客も例年より格段に増え、大成功を収めました。

来年度以降の課題として挙げられるのは、「サークル活動との線引き」です。このイベントを近江楽座のプロジェクトとして継続していくためには、単なるサークル活動の範囲で終わらない（もちろん今年もそのことを意識してきましたが、さらにそこから大きく発展させた）イベント作りをしていく必要があると感じました。KJRFは地域と深く結びついた音楽イベントを目指しています。地域の方々と音楽を通じて交流を深めていきたいと強く願っています。同時に来場者・出演者・スタッフが一丸となり、心から音楽を楽しめる空間を創ることを目指しています。



楽座新聞

総括

指導教員から 人間文化学部 島村一平

長い間お疲れさまでした。学生のみでの運営ということで、ほとんどイベントに関わることはなかったのですが、スタッフの皆さんの熱意やエネルギーは十分感じ取ることができました。県立大学内でポスターやチラシを目にしていましたよ。大変だったと思いますが、無事最後までやりきってくれたことをうれしく思います。今年度の成果と課題を明確にし、来年度以降に役立ててもらえたらと思います。今後の発展に大いに期待します。

12 未来看護塾

- チーム名** 未来看護塾
代表者 矢崎理紗
代表者所属 人間看護学部
メンバー数 47人（うち学生コアメンバー10人）
指導担当教員 伊丹君和
活動場所 彦根市内
関係団体 彦根市立病院
活動概要 子どもや高齢者、健常者や障がいをもつ人などを対象に幅広く活動しています。人とのふれあいの中で、コミュニケーションの取り方や健康についてなど多くの学びを得られる時間をつくっていきます。



チームからの活動報告

成果 - できたこと -

毎月、彦根市立病院、NPO ぼぼハウスのどこかに参加をすることができた。緩和ケア病棟には、授業のない長期休暇に多く参加できたと思う。NPO 法人ぼぼハウスでは、今年度は土日の行事が多くあり、参加回数が多くなったように感じる。城南小学校学童保育には、一時休止になる前は毎月多く参加していた。10月に行く予定であった学童保育の分は、市立病院小児科での活動に回して参加することができた。

課題 - できなかったこと -

10月に城南小学校学童保育が休止になってしまい、再開の交渉に行く予定ではいたが、うまくいけなかった。学童保育への参加要望が多く聞かれるので、今後再開できるように持っていくことを考えなければならぬ。

小児科病棟への参加が少なくなってしまった。小児

科に入院していて、遊ぶことのできる子どもがその時によって違い、行っても子どもがいなかったということが原因だと考える。子どもがいなくても自分たちのできることを考えられるように意識の統一をしていきたい。

活動を振り返って

今年度の大きな成果になったことは、主に3つあります。1つは、みかん通信の発行を再開できたこと。みかん通信によって他のメンバーが感じた反省点や学んだことの共有ができるようになりました。2つめは、湖風祭の本祭だけでなく夏の湖風祭でのちびっこ広場の開催ができたこと。3つめは、イベントの数が多くなり、様々なところに足を運べたことです。ぼぼハウスでのイベントの他、野瀬町からのお誘いや、滋賀県福祉協会のイベントへの参加など。このような交流を大切に、根強く地域の方との交流を深めていきたいと考えています。こちらからの働き掛けも積極的に行っていきたいです。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目	チームとして得られたスキルの具体的事例
②交渉力・コミュニケーション能力	毎回の彦根市立病院、ぼぼハウスでの活動をはじめ、視覚障害者の方との野球試合、湖風祭や毎日マラソンでのちびっこ広場など様々な年齢層の方とコミュニケーションする力を身につけた。
④企画・プロデュース力	今年度から、夏の湖風祭に参加することができた。彦根市立病院でのクリスマス会も成功することができた。
⑥地域の方との人的ネットワーク	昨年度の毎日マラソンで出会った滋賀県福祉協会の方と、交流を続けている。ぼぼハウスからの紹介で、託児所での活動が入ってきている。

成果物／制作物



楽座新聞



みかん通信

総括

指導教員から 人間看護学部 伊丹君和

「未来看護塾」の活動は、学生の自ら学ぶ力を育てるとともに、人との関わりや看護への興味・関心を深めるものであり、教育的効果も大きいと考えています。また、学生間の縦と横のつながりの関係性はもちろん、地域の方々との関係性なども深まり、自ずとコミュニケーション力の向上にもつながっていきます。また、悩み試行錯誤を重ねる活動の中で、豊かな感性をも育んでいます。地域への浸透も少しずつ拡がりをみせており、これも「未来看護塾」の地道で継続的な活動の成果だと思っています。看護学生だからこそできる地域貢献（生き生き健康支援活動）が今後益々発展し、地域の方々により健康で笑顔になるために貢献できるよう、そして支援する学生たちも成長できるよう、引き続き応援していきます。

近江楽座活動年度

H16

H17

H18

H19

H20

H21

12

13 七曲り仏壇職人にまつわる 絵本作成プロジェクト

- チーム名** 七曲りでいっちょやったるか！！
- 代表者** 馬場葵
- 代表者所属** 人間文化学部
- メンバー数** 8人（うち学生コアメンバー5人）
- 指導担当教員** 黒田末壽、武邑尚彦
- 活動場所** 彦根市内
- 関係団体** NPO 法人 Links
- 活動概要** 昨年完成した紙芝居『ゆうたとお仏壇』をメインに、読み聞かせや、手にとってより仏壇と職人について知ってもらうために絵本づくりに取り組んでいます。私たちの活動が地域の活力となることをめざしています。



チームからの活動報告

成果 - できたこと -

原画展を大津市の県立図書館で実施。県内の方に、七曲りの仏壇職人さんや、ななちよの活動をアピールすることができた。

読み聞かせは、彦根市を中心に様々な場所で行なえた。セリフに強弱をつけたり、紙芝居をめくるスピードなど工夫し、改善を重ねている。

課題 - できなかったこと -

実際の活動や、楽座の面談のときにいただいたアドバイスにより、絵本制作より、今は紙芝居の読み聞かせで、直接私たちが伝える方が、意味があるとの考えに至った。そのため、年間を通して紙芝居の読み聞かせを中心に行なう方針に変更し、絵本制作は行なわなかった。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目	チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	一回生の勉強会として、今までお世話になった仏壇職人さんに聞き取りを改めて行い、1回生の新しい目線で七曲りを見ることができた。また、読み聞かせの際に、どこでめくると面白いかな、声を変えて読むなどの工夫を行なった。
②交渉力・コミュニケーション能力	聞き取りに行く約束などの交渉を行なった。また、三軒茶屋でのイベントなどで他の参加者の方と交流することができた。滋賀県立図書館での原画展開催でも、図書館の担当の方と頻りに打ち合わせを行なった。
⑥地域の方との人的ネットワーク	勉強会で頻繁に七曲りに赴くことで、チームとして地域との深まりを強めることができた。
⑦学内での新たな出会い・交流	おとくらでの読み聞かせや、実行には至らなかったが、多くのプロジェクトとのコラボレーションの可能性を見出した。

活動を振り返って

当初計画では、6月に原画展→前期読み聞かせ→後期絵本制作の活動であったが、結果的に6月原画展、年間を通して読み聞かせ、後期からは勉強会を中心に行なった。実際に活動していく中で柔軟に対応し、変更しながら活動を進めた。成果物はないが、読み聞かせを通して、“七曲がりをもっと知ってもらいたい”という私達の思いを行動にうつせたこと、そして私達ななちよ、特に新メンバーの七曲がりのつながりを強くできたという面では有意義な年だったと思う。しかし予算を大幅に残してしまい、有効に使うことができなかった。早め早めに対応していくべきだった。

県立図書館で読み聞かせを行なった際に、「彦根が仏壇の産地ってこと知らなかった！」という声が多かったのが印象的であった。そういった現状を知り、来年度も読み聞かせなど外に向けたアピールを通して七曲りの仏壇職人さんのことをもっとたくさんの人に知ってもらえるよう活動していきたい。来年度からはじまる観光化事業にも協力し、違う分野からのアプローチも行なっていきたい。

成果物／制作物



楽座新聞



七曲り原画展
パネル

総括

指導教員から (抜粋) 人間文化学部 黒田末壽

本プロジェクト（ななちよ）は、紙芝居というメディアを上手に使って、彦根仏壇産業を多くの人に知ってもらうことに成功している。紙芝居の読み聞かせや県立図書館での原画展は、大変評判がよく、協働の仏壇職人さんたちからもよい評価を得ている。地味ではあるが、地域との協働で確実な成果をあげ、相互信頼をまず結果になっているといえる。また、本年度は、当初予定していた絵本づくりを変更して、新メンバーに仏壇製作の現状と課題を認識してもらうための新たな聞き取り、そして紙芝居の読み聞かせに集中したが、プロジェクトの後継者を育て、地域の期待に継続して応える基盤を作ったという意味で、方針の変更は臨機応変の対処と評価できる。

今後の展開を考えると、映像も含めた活動の記録が必要であり、それをもとに、その都度、総括し、対応者に活動ニュース配信した方がよいのだが、これが十分とはいえない。また、仏壇職の歴史や製作法などのより深い知識を得たいという県民の要望に対応できていない。子どもに喚起した仏壇への興味を仏壇製作の現場と結びつけるなどもまだよくできていない。しかし、これらは、このプロジェクトが掘り起こしたニーズと評価することもでき、次の課題としてほしい。

14 Let's 複合

チーム名	廃棄物バスターズ
代表者	井口愛子
代表者所属	工学研究科
メンバー数	20人（うち学生コアメンバー3人）
指導担当教員	徳満勝久
活動場所	彦根市内、滋賀県内
関係団体	ひこねキレイキャンペーン隊、 上西産業(株)、みどりのいのちつなぎ隊
活動概要	リサイクルプランターを彦根市、さらには滋賀県全体に広げる活動に加え、体操服100%循環型社会の構築計画を本格的に行っていきます。



チームからの活動報告

成果 - できたこと -

①「市内小学校体操服の100%ケミカルリサイクル可能な製品への移行に向けた取り組み」、②「硬質廃プラ回収システムの構築と地域へのPR活動」、③「学内での美化・緑化と不法駐輪の防止（リサイクルプランターの設置）」、④「地域活性化への取り組み」等について年度当初予定していた以上の成果が得られた。特に、廃プラ回収システム構築の活動を通じて知り合った県内授産福祉施設における「hana-wa」プロジェクトの活動は、我々が考えたアイデアを具体化すると同時に、協力企業との交渉や県社会福祉協議会（淡海フィランソロピーネット）とも協議を重ね、今年4月から事業化することが決定した（協力企業6社）。

課題 - できなかったこと -

廃プラ回収システムについて、①リサイクルプランターを販売しているアヤハディオで回収活動とPR活動が行えなかったこと（希望される時期と当方の活動

できる時期が合わなかったため）。②広報誌やピラ等による情報の発信に時間がかかったこと。③夏休み時期を利用して県立大学の南駐車場で回収活動を行ったが、長期休暇時期以外での回収場所の確保が課題であることが分かった。

活動を振り返って

小学校におけるリサイクル体操服への切り替えに向けた取り組みでは、23年度より彦根市内の1校で切り替わる事が決定した。硬質廃プラ回収システムの構築では、県内授産福祉施設におけるリサイクルプランター用いた「hana-wa」プロジェクトを提案し、事業化することになった。地域活性化への取り組みでも、多くのイベントや講習会等に参加し、活発に活動を展開した。新たに学内にも目を向け、美化・緑化と不法駐輪防止活動（リサイクルプランターの設置）に取り組んだが、共有の場を整備する企画は、楽座事務局との見解の相違により実現しなかった。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目	チームとして得られたスキルの具体的事例
②交渉力・コミュニケーション能力	大学以外の方々（企業、行政、地域の方々）と意見を交わすことによって交渉力やコミュニケーション能力を身につけることが出来た。
③計画力・スケジュール管理能力	それぞれの活動を通じて、計画力やスケジュール能力を着実に身につけることが出来た。
④企画・プロデュース力	「学内でのプランターの設置」事業や「hana-wa」プロジェクトは新たに企画した活動であり、それらを実際に実施する上で、事業遂行能力やプロデュース力を身につけることが出来た。
⑤問題解決力	hana-wa プロジェクトでは全てが初めての取り組みであるため、問題も多く発生した。しかし、「H23年4月事業化」という目標を設定することにより、解決すべき課題の優先順位を決定し、一つひとつ着実に解決する中で問題解決力を身につけることが出来た。
⑥地域の方との人的ネットワーク	従来からのネットワークに加えて、県内の各授産福祉施設（「いしずみの家」や「にっこり作業所」等）、「hana-wa」プロジェクトを推進するためのPCR協議会や淡海フィランソロピーネット事務局の方々、近江八幡市の市民ボランティア団体「緑のいのちつなぎ隊」の方々等、外部の多くの人たちとの交流をもつことが出来た。中でも、「緑のいのちつなぎ隊」の方々とは、堆肥作りを通じて「hana-waプロジェクト」の立ち上げに繋がり、エコキャップ活動を通じて授産福祉施設やPCR協議会の方々も繋がったりと、人的ネットワークが新たに繋がっていくということを実感した年であった。

成果物／制作物



楽座新聞



グリーンカーテン
ガイドライン

総括

指導教員から（抜粋） 工学部 徳満勝久

今年度は、今までとは違い「学生達自らが進んで活動を行った年」であったと思います。特に、「hana-wa」プロジェクトは、授産福祉施設が抱える問題点を調べ上げ、学生達が考えたアイデアを具体化すると同時に、協力企業との交渉（値段交渉や協力依頼交渉含む）や県社会福祉協議会（淡海フィランソロピーネット）等とも協議を重ね、今年4月から事業化できる（協力企業6社）までになったことは素晴らしい活動の成果だと思います。これは、従来の「産官学連携」から更に発展した「産官学福」連携という新しいビジネスモデルではないかと思います。

また、「市内小学校体操服の100%ケミカルリサイクル可能な製品への移行に向けた取り組み」では、各企業さんの協力も得ながら達成できたことも素晴らしい成果であると思います。「地域活性への取り組み」等についても、年度当初予定していた以上の成果が得られたのではないかと思います。ただ、「学内の美化・緑化」と「不法駐輪の防止（リサイクルプランターの設置）」に関して、近江楽座事務局との見解の相違があり、学生達が「自ら進んで」学内を良くしよう」と企画してくれたことが最後まで達成できなかったのは残念であった。

15 障がい児・者、自立支援・共生社会プロジェクト

チーム名	ボランティアサークル Harmony
代表者	鈴木美穂
代表者所属	人間文化学部
メンバー数	19人（うち学生コアメンバー3人）
指導担当教員	黒田末壽、竹下秀子
活動場所	学内、彦根市内、東近江市内
関係団体	障害者の就労と余暇を考える会メロディー
活動概要	障がい児とその家族への支援、障がい児・者への理解を深め、彼らを支える地域社会づくりの推進を目的とします。また活動を通して子ども達のよりよい環境づくりをめざしています。



チームからの活動報告

成果 - できたこと -

10月と3月を除き、多少内容の変更はあったが、定例活動を計画通り行うことができた。

課題 - できなかったこと -

6月に行う予定だった「カヌー体験」と10月に行う予定だった「乗馬体験」は参加者不足のため延期となった。

活動を振り返って

定例活動では、今年度から「新たな試み」として導入した「お絵かき」「散歩」という2つの活動は両方とも子どもたちの成長を促すための良い結果を得ることができました。今後もこれらの活動を継続していき、子どもたちの成長を見守っていきたいです。また、それにとどまらず子どもたちの可能性を広げるために、新たな活動を模索していきたいと思います。

また、本年度は初めて夏の社会体験学習を学生が全て企画・運営しました。学生が主体となって企画することは今まで無かったため、さまざまな戸惑いはありましたが、チームメンバー全員で協力し困難を克服したことにより、学生の中で親近感が深まりました。今回は企画・運営にあたり、さまざまな課題も見つかったので今後はそれを克服できるようにみんなで協力していきたいです。

さらに、新たな定例活動場所を確保することが出来ました。市内で探してみたところ中地区公民館が快く場所を提供してくれました。地域の方たちが私たちの活動を受け入れてくれたことにとても感謝しています。今後も私たちの活動に理解を示してくれる協力者を増やしていき、より多くの人の障害に対する理解を深めていきたいです。

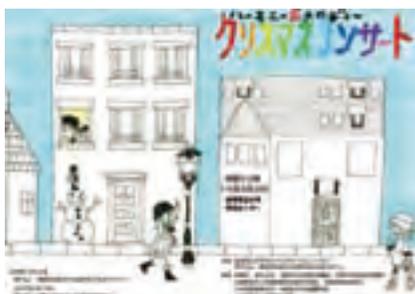
スキルアップ - 新たに得たこと -

項目	チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	養護学校の教員を招いて行った「学習会」を開催するにあたり、「発達障害」に対する基礎知識を身につけることができた。定例活動によって、実際に障害児とその家族と触れ合い、「障害」に対する理解が深まった。 さらに、宿泊体験学習やバス旅行を行ったことで、普段の活動の際には見えないような子どもたちの姿を見ることが出来たことで「障害」に対する理解がより深まった。また、チームメンバーやNPO法人の方たちと長い時間を共有できたため、いろいろな情報の共有や親近感が深まった。
④企画・プロデュース力	夏の社会体験学習を開催するにあたり、学生自ら企画運営したため、企画運営に必要なスキルを身につけることができた。他にも、クリスマスコンサートを開催するにあたり、子どもたちや外部の障害者と関わったことで障害に対する理解が深まり、運営面でも必要なスキルを身につけることができた。

成果物／制作物



楽座新聞



クリスマスコンサート
パンフレット



クリスマスコンサート チラシ

総括

指導教員から (抜粋) 人間文化学部 竹下秀子

本年度も「障害者の就労と余暇を考える会メロディー」との共同で、障がい児・者支援の活動を精力的に展開した。茶道や粘土造形などの定例活動のほか、宿泊体験、バス旅行にもとりくんだ。活動は障がい当事者の地域での暮らしや個人、家族としての発達や余暇の充実に寄与するだけではなく、地域住民や、地域福祉の関係者、養護学校教員、地域在住の芸術家、高校生や高校教員、他大学の学生や教員など、さまざまな人々との連携をつくりだしており、エンパワメントという観点から地域の活性化に大いに貢献している。大学および地域の行事としても恒例化したクリスマスコンサートには、本年度も多くの人々が参加し、吹奏楽団やダンスサークルも参加するなど、本学の学生グループを障がい児・者支援や地域交流の場に導く機会ともなっている。さらに、昨年10月の東近江市社会福祉大会では、ボランティアグループとして多年にわたりこの地域の社会福祉に貢献したことが評価され、東近江市社会福祉協議会会長表彰を受けた。学生グループとしては唯一の受賞であり、この活動が地域の人々からも認知され、評価されつつあることを喜びたい。

近江楽座活動年度

H16

H17

H18

H19

H20

H21

15

16 ART FORUM 2010 DIG'S

チーム名	DIG'S
代表者	本間浩平
代表者所属	環境科学部
メンバー数	18人（うち学生コアメンバー 15人）
指導担当教員	柴田いづみ
活動場所	学内、近江八幡市内
関係団体	—
活動概要	近江八幡の埋もれかけた「宝物」を発掘し、発信する活動をしています。また、まちづくりの次代を担う子どもたちを育てる「キッズ学芸員プロジェクト」や情報発信拠点カフェ DIG'S の整備活動も行っています。



チームからの活動報告

成果 - できたこと -

活動拠点整備、カフェ DIG'S 貸し出し、前田邸ワークショップ、西の湖自然観察会。

課題 - できなかったこと -

耐震補強工事、追加メンバー募集。

活動を振り返って

〔総括〕

- ・年間を通してスケジュールや人員の管理が行き届かず、一部負担の偏りや活動の停滞を生んでしまった。今後はもっと明確な役割分担をし、作業の効率化を図りたい。
- ・予定していた活動は行えているものの、その活動があまり地域に認知されていない。カフェの隣のお宅や同じ自治会内などまずは最も身近な関係作りをしなければならぬと感じた。

- ・他大学の団体との交流で様々な意見が出、刺激になったので、来年度も他大学との交流を持ちネットワークを広げていきたい。
- ・予定していたスケジュール通りのイベントなどの活動が行えていなかった。
- ・当初予定になかった活動もいくつか出来たことは大変よかった。
〔今後の展開・提案〕
- ・同じ滋賀県立大学の「おとくらプロジェクト」と兵庫県立大学、香川大学の学生と交流・意見交換会を行って離れた地域間でヒト・モノの交換ができればそれぞれの活動や地域に対して刺激になると思うので、今回のつながりを活かしてそのような企画ができればと思う。
- ・予定を立てる際に準備段階からのスケジュール管理を行っていくことで、実際予定していた活動が行えるのではと思う。
- ・今年度の活動は自分たちが拠点としている旧市街地外の人との交流が多く、身近な人たちとの交流が少なかった。今後は身近な地域との連携した活動を行えればと考える。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目	チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	西の湖や前田邸の植生調査を行うにあたり、生態学科の教員や学生に協力していただいたので今まで深く学べなかった植生の専門知識を得ることができた。
⑥地域の方との人的ネットワーク	キッズ学芸員・貸しスペース・リレートーク・カフェ運営の活動する上で多くの地域の方々の協力を受け、多様な世代・分野の方々とつながることができた。
⑧その他（他大学生との交流）	他大学の学生に活動へ参加していただいたり、DIG'S の活動に興味を持っていただいて、視察に来ていただいた他大学の活動団体と、今後の活動を連携できる可能性について協議する場を設けることができた。

成果物／制作物



楽座新聞



活動報告冊子

総括

指導教員から 環境科学部 柴田いづみ

2009年のヴォーリズ展を機会に結成されたDIG'Sは、柴田研究室の活動であった、病院の壁画やヴォーリズスケッチ会などの「ART FORUM」から「まち・子ども達・歴史・自然」というキーワードを引き継いでいますが、2009年からは町家の改修をして「場」を得たところが、新規な展開でした。2010年には、COP10に合わせて、自然を大きく扱っていますが、キーワードは継続しています。特に、継承者としての子ども達との「自然観察会」、識者を招いての「リレートーク」は、地域資産を理解するよい機会だったと思います。親御さん達との連絡、紹介した講師達との連絡もふくめ、学生達の運営は、「自ら学ぶ」姿勢そのものでした。地域の方々にDIG'Sを知ってもらいたい。西の湖やラムサール条約の知識を共有したいという情熱が大きな原動力だったと思います。カフェDIG'Sの2010年の使命は、「まちの共同運営者を見つける」ことだったのですが、それらも複数になりすんでいます。会議を重ね、仲間で仕事を配分しながらすすめていましたが、あれだけの多くの内容を良く完遂させられたと多大に評価しています。来年への課題は、4月にメンバーを早期に募集して活動を充実させる事だと思っています。

17 湖北 戦国プロジェクト

チーム名	長浜 BASARA
代表者	金山和樹
代表者所属	人間文化科学研究科
メンバー数	4人（うち学生コアメンバー4人）
指導担当教員	印南比呂志
活動場所	滋賀県内
関係団体	—
活動概要	湖北地方で、企業との連携のもと戦国関連の製品開発を進めています。また、県内各地場産業と協同した製品開発、イベント企画や店舗の改装なども予定しており、学生の想像力をフル活用します。



チームからの活動報告

成果 - できたこと -

“ここくらし”に関する動きでは、OGの方々の適切な指示もあり、比較的達成率は高かったように思われる。アポイントを取る段階から協力を承諾いただけるまでをメンバー各自がそれぞれで動けたのも効率的であり、それぞれが責任を持って行動できた。結果的に各メンバーに均等に役割が分配され、コアメンバー全員のスキルアップに繋がった。

課題 - できなかったこと -

LLP「歴屋」との活動は、上半期のうちに活動拠点がなくなったことで、当初の目的であった長浜での活動やチームによるイベント企画、商品開発は全くできなかった。そのこともあって商品開発に興味を持ってきて参加してくれたメンバーはチームから脱退した。“ここくらし”の課題はおおむね達成できたがもう少し余裕のあるスケジュールが組めれば完成度はさらに上がったかもしれない。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目	チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	産地の伝産品を調査するにあたり職人の方々からのヒアリングにより、メンバー全員が歴史的な専門知識を得ることができた。
②交渉力・コミュニケーション能力	それぞれの産地へ協力依頼に訪問し、実際に多くの協力を得ることができた。
③計画力・スケジュール管理能力	各展示会に向けてのスケジュールを管理しながら打ち合わせ・会議をこなすことができた。
④企画・プロデュース力	展示や宣伝の方法を学生主体で考案できた。
⑥地域の方との人的ネットワーク	チームと地域の方だけでなく、県内の地域同士のネットワークを構築することができた。

活動を振り返って

〔総括〕申請当初の LLP「歴屋」との活動計画は、活動拠点を失うことによって破綻してしまった。企画時点でそのような不測の事態を想定していなかったことに問題があったように思われ反省すべき点である。このため、協力企業に活動の大部分を依存するようなことは避け、企画段階では学生のみで運営できる規模から考案しなくてはならないと学んだ。下半期に入ってから“ここくらし”での活動においては担当教員やOGの方々の協力もあり精力的に活動できたと感じている。

〔提案〕“ここくらし”の活動を通してさまざまな産地の異業種同士の意見や知識の交流によって滋賀県の産業全体に団結力や活気が生まれれば幸いである。2011年インテリアライフスタイル東京に出展する企業の方々にもぜひ成功を収めてほしい。そして学生も情報発信を通して知識、技術、その他様々な能力を身につけることができればと思う。

成果物／制作物



楽座新聞



草製品こくらし



こくらし展 DM

総括

指導教員から 人間文化学部 印南比呂志

本プロジェクトを通して企業としての役割と学生としての役割を明確に認識することで我々が何をすべきかを的確に把握し実行に移すことを体験できたはず。その上で今後の展開に期待したい。

近江楽座活動年度

H16

H17

H18

H19

H20

H21

17

18

おとくらプロジェクト

チーム名	おとくらプロジェクト
代表者	古橋香了
代表者所属	環境科学部
メンバー数	15人（うち学生コアメンバー6人）
指導担当教員	奥貫隆
活動場所	彦根市内
関係団体	蝸牛会
活動概要	彦根市高宮町の古民家と蔵が小さな喫茶、ギャラリー、イベントスペースに生まれ変わりました。展示会、演奏会などのイベントを通してさまざまなジャンルの方とのつながりの輪を広げていきます。



チームからの活動報告

成果 - できたこと -

ギャラリー展示、コンサート、映画上映会、ミニライブ、ワークショップ、楽座のつながり。

課題 - できなかったこと -

勉強会。

活動を振り返って

今年一年の活動は、様々な方に支えられて成り立ってきたと思う。はじめのうちは、正直なところどうしたらいいの全くわからず、一步、一步模索しながら進んできた。イベントでは、誰をターゲットにどんな事をするのかなど、ミーティングで何度も話し合いを設けた。まだまだ要領が悪く、広報など情報の発信が遅かったりして、なかなか集客につながらなかったり

と思っ描いたようには進まない事も多くある。今年から近江楽座の新規プロジェクトとして活動し、少しずつ学生企画で、ワークショップを行ったり、コンサート・ギャラリーの展示をはじめ企画・運営も軌道に乗ってきたと思う。

それには、楽座という大学内の横のつながりから、新聞やTVなどのメディアを通じた、学外のつながり、また、そこから生まれる地域の人とのつながりなど様々な方とのつながりがとても大きいと思う。

日常の活動では、喫茶の運営も人数が少なく、交替で入るといった状況でなく、個人個人の気持ちの温度差が浮き彫りになっている部分もある。しかし、当番をしていて、いつもきて下さる近所の方とお話したりすることで、もっとこうしたら？などアドバイスを頂けたり、差し入れを貰ったりと心暖まることも多い。また、最近はやっとした会議などで使って下さる方も増え、そういった利用方法でもお客さんを増やしていきたい。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目	チームとして得られたスキルの具体的事例
②交渉力・コミュニケーション能力	地元の敬老会で出し物をさせていただいて、どういう出し物ならばお年寄りに喜んでいただけるかが少しながらわかった。地域にはお年寄りが多いので、これから地元の方々とお付き合いをしていく上で必要なコミュニケーション能力が身についたと思う。
③計画力・スケジュール管理能力	コンサートなどのイベントが開催される際にはたくさんのお客様がいらっしゃるのでスタッフ総出で、飲み物や食べ物を用意する必要がある。お客様をお待たせしないように1番よいタイミングで飲み物や食べ物をお出すにはどうしたらよいか…時間を逆算して用意を進める計画力が身についた。また、計画通りいかない際に臨機応変に対応する問題解決能力が身についた。
④企画・プロデュース力	7月に開催された竹のワークショップでは子どもが対象で、かつ刃物や火を使用したため、今までにはなかったお客様の安全を考えて企画、進行する機会となった。
⑥地域の方との人的ネットワーク	喫茶店にいらして下さるお客様と接することで、顔見知りの方はもちろん、初めて会う方とのコミュニケーションの取り方が以前よりもうまくなった。お店にいらっしゃるお客様はもちろんのこと、お客様から紹介していただいた方まで人的ネットワークは広がっている。また、1月に恵比寿祭りに参加し、地元の人により知っていただけたと思う。
⑦学内での新たな出会い・交流	「とよさらだ」と「一姓」さんに、おとくらの前で野菜の販売を行っていただいた。
⑧学外での新たな出会い・交流	「DIG'S」さんのお誘いで、兵庫県立大学、香川大学の学生 cafe を経営するサークルと交流。大いに刺激を受けた。これからも連絡をとりあい連携していく予定。同じく「DIG'S」さんにて活動される「ひつじぐも」さんにコーヒーマスターのドリップ講習をおこなっていただいた。学内では出会えないであろう「ひつじぐも」さんともご縁ができた。コーヒーマスターの専門知識も得られた。また、この1年ラジオや新聞、テレビでおとくらを取り上げていただいた。

成果物／制作物



楽座新聞



活動紹介リーフレット

総括

指導教員から (抜粋) 地域づくり教育研究センター 奥貫隆

「おとくら」プロジェクトは、2008.11.2 の学生コンペからスタートしました。旧中山道高宮町の加藤邸の一部を借りて、中西先生の指導のもとに、土間・和室・蔵をそれぞれカフェ・ギャラリー・音楽室に改修しました。オープンは、2009.9.19。近江楽座プロジェクトとしてはちょうど一年が経過しましたが、5 月には、滋賀県国際協会主催のピアノとバイオリンのコンサート、9 月におとくら一周年コンサート、12 月に声楽家白谷仁子さんのリサイタル「冬の月に」を開催し、地域の人だけではなく遠方からも多くの人を呼び寄せました。米原出身の若い音楽家、岡田健太郎さんは、9 月の一周年コンサートには特別出演で学生の演奏のあと数々のオリジナル曲を披露。即興で「お・と・く・ら」のテーマミュージックを演奏し、参加者を楽しませてくれました。

おとくらの活動は、少しずつ地域に根付きつつあります。学生たちの活動は、毎週土日のみですが、カフェをオープンし、温かいコーヒー、紅茶、クッキーをお客様に出しています。おとくらにいれば、何かやっている。学生たちの声が聞こえる。近所の人に会える……。 「おとくらプロジェクト」が高宮のまちに新しい風を吹かせてくれることを期待しています。

近江楽座活動年度

H16

H17

H18

H19

H20

H21

18

19 Living design 14th FASHION SHOW

チーム名	生活デザイン学科 14 期生
代表者	松永沙織
代表者所属	人間文化学部
メンバー数	66 人（うち学生コアメンバー 24 人）
指導担当教員	森下あおい
活動場所	学内、彦根市内
関係団体	—
活動概要	ファッションショーを通じて、専門性を活かし滋賀の繊維産業を地域に発信していきます。今年度は地元の子どもたちとの服作りを取り入れ、学生と地域が一体となってショーをつくりあげます。



チームからの活動報告

成果 - できたこと -

5 月に話し合いをスタートし、テーマやコンセプトについてしっかり固めることが出来た。メンバーを班分けし、班毎に分担された仕事をこなすことができた。

こどもデザインでは、ショーと展示は 1 回ずつしか出来なかったが、デザインしてくれた子どもやそのご家族と深く交流することができ、内容の濃いものにする事ができた。その他観に来てくれた地域の方々に、学生と子どものデザインの違いを楽しんでもらえた。

課題 - できなかったこと -

構成班や広報班などに分かれて、効率よく作業を進めていけたことは良かった。しかし全体での集まりが悪く、それぞれの班がどういう状況なのかを把握できていない部分もあった。

小物販売では売上が伸びず、商品の売り方や意識の改善が必要であると思った。

活動を振り返って

〔総括〕何度も話し合いを重ね、新たな取り組みとして、ショーの実施の他に子どもデザインと小物販売を行うことにした。子どもデザインでは、デザインに関わってくれた子どもと一緒にショーを行うことが実現した。小物販売については、興味は持って頂けたが売上が伸びなかった。ショーの準備で手いっぱいになってしまったり、メンバー間で意識に差があったのが大きかったと思う。スーパーパンフレットについては、布を提供して下さった布会社さんについて多く触れ、地域との関わりを載せることによって、作品だけでなく、このプロジェクトの面白さが出たと思う。

〔提案〕3 回生だけでなく、コアメンバーに 1、2 回生も参加してもらいたいと思う。問題点など見つけやすくなり、次に活かしていくことも期待できる。今回の地域住民参加型のファッションショーは参加者、観客の両方から好評を頂いているので、もっと追究していければ良いと思う。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目	チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	服作りにおいては、授業で習ってきた基礎を念頭に、更に本などで勉強したりして取り組むことができた。初めて服を作るという人もいる中、縫製技術が身についた。パンフレットや活動報告書制作では、紙面のデザインやレイアウトといった分野においても実践を積み、スキルアップできた。
②交渉力・コミュニケーション能力	ショーを行うにあたって場所を提供して下さる施設や団体さんと打ち合わせをしたり、スポンサーの獲得においても、普段は接することのない企業の方々とお話をし、そこで、どうしたら自分たちの活動を理解してもらえるかを考えて伝えることが出来た。
④企画・プロデュース力	今までよりもより深く地域の人と関わりたいということで、こどもデザインと小物販売を企画し、実行することができた。こどもデザインについては、地域の方をはじめ多くの人から好評を頂いた。
⑥地域の方との人的ネットワーク	毎年お世話になっている企業の方々はもちろん、今年度はこどもデザインに関わってくれた子どもやそのご家族ともつながりを持つことができた。来年も是非ショーを行ってくださいという声も頂き、地域の方々と更に関係が深まっているのを感じている。
⑦学内での新たな出会い・交流	3、4 回目のショーは規模が大きく、生活デザイン学科の学生だけでは人数が足りないため、学内でモデルの呼びかけを行った。学部・学年を越えた学生と共にショーをつくり上げることができ、新たな人脈を築けた。

成果物／制作物



楽座新聞



スーパーパンフ



ミニパンフ

総括

指導教員から（抜粋） 人間文化学部 森下あおい

今年度は中心となって活動するメンバーの人数がやや少なかったものの活動自体は極めて堅実で、各自が自分のやるべきことに取り組んだ。年間を通じて常にしっかりと企画を遂行した努力に対して高い評価をしたい。

新しい企画として、子どもからデザイン案を求めてそれをもとに制作し、さらに子どもに着てもらい、という流れを取り入れたことは、これまでの企画と異なる視点であり、地域の人、それも子どもに、ものづくりの面白さを体験してもらい、新たな発見や喜びを得ることとなった。

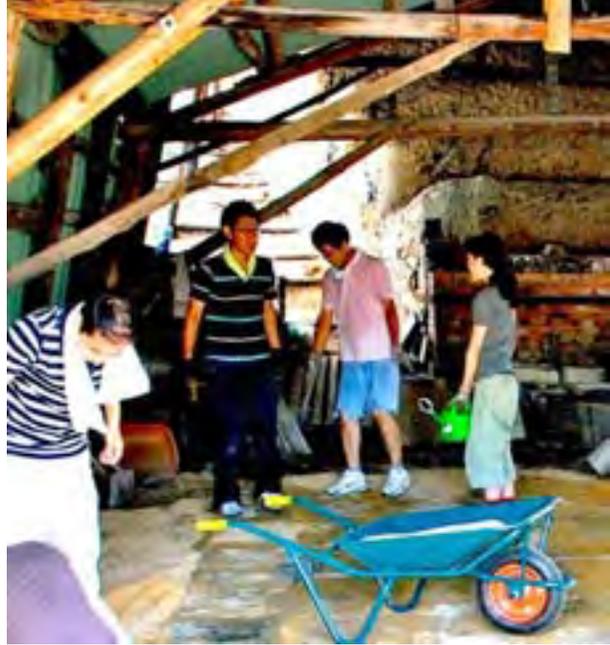
チームとしての活動の課題は、如何に自然に活動の輪を広げていけるかであろう。参加や取組の仕方を強制しすぎず、しかし皆で協力できるような体制を作るためには、学生からの意見にあったように、現在の3回生中心の取り組みとして定着しすぎず、1.2回生が入って、学年を超えた関係で、ともに活動を行うことも良いだろう。活動は参加してやってみて初めてその面白さや充実感が得られる。そうした意味では、就職活動などがまだ始まらない1.2回生の参加は、良いかたちでの広がりを作るきっかけになると考えられる。

20

信・楽・人

-shigaraki field gallery project-

- チーム名 信・楽・人 -shigaraki field gallery project-
- 代表者 木村真也
- 代表者所属 環境科学研究科
- メンバー数 19人（うち学生コアメンバー7人）
- 指導担当教員 印南比呂志
- 活動場所 信楽町長野
- 関係団体 窯元散策路のwa、信楽ライフセラミックス展事務局
- 活動概要 まちの中に情報や活動を発信する拠点を実際に作り、地元の方との密度の高いコミュニケーションを心がけながら、訪れた人や地元の人にまちの魅力を再発見してもらえようことを目指しています。



チームからの活動報告

成果 - できたこと -

- ・登り窯改装（カフェ、ショップ部分の改装）
- ・shiroiro-ie 企画展
- ・朝鮮通信使献上食器の調査、展示
- ・ライフセラミックス展の作業補助

課題 - できなかったこと -

- ・登り窯改装作業にてアトリエ部分の改装
- ・窯元工房整備
- ・人物マップ

活動を振り返って

今年度の活動は 1) 登り窯の改装（Ogama）、献上食器の調査、2) shiroiro-ie 企画展、3) ライフセラミックス展の作業補助、以上 3 つの活動を行うことができました。10月から11月にかけて信楽にて行われた「信楽まちなか芸術祭」に向けて、各活動が動きました。

登り窯ではカフェ、ショップを行うことで観光客や地元の人に登り窯を訪れていただき、登り窯について知っていただく中で、交流をすることができました。予定していたことが出来なかったことについては、人員とスケジューリングをさらに計画的に行うことが今後の課題と考え、後輩へ伝えていく必要があると思います。各プロジェクトを通じて、信楽という地域の人と深く付き合い、話し合い、コミュニケーションをとることで信楽を知り、また活動中には信楽の人に励まされ、学生と地元の人がお互いに尊敬しあう希少なプロジェクトができたと思っています。

各人がプロジェクトを進めるに当たり、目標を持ち、必要な作業を自ら考え、実行することができたからこそできたものではないかと考えます。そして活動を通して、社会と直接やりとりする中で、学校では学べないこと、貴重な経験を積み、成長を遂げることができたと感じています。拠点が増えたことに満足せず、点から線へ、線から面へ活動が広がることで、地域活性化の一端となれるように今後も継続して活動を行っていきます。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目	チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	登り窯改装において、現場作業の中、実際に建設作業するために必要な材料選択、作業手順を学び、また各専門業者の方と接し、専門知識を習得することができた。窯元や、信楽の歴史についてより深く知る事が出来
②交渉力・コミュニケーション能力	登り窯改装において、所有者の窯元さんの意見に耳を傾けること、職人さんとのやり取り、カフェ&ショップでのお客さんとのやり取り、また観光客とのやり取りにおいて、各人が社会の人とのコミュニケーションをとる技術の向上につながった。
③計画力・スケジュール管理能力	オープンの期日が決まっている中で、作業の工程を考え、作業日一日のスケジュールを考える中で、完成させるために必要な作業を計画的に組み立てる能力を向上させることができた。
④企画・プロデュース力	shiroiro-ie の企画展において、展覧会を企画し、広報を行う中で、イベントを作り上げる能力の向上につながった。また信楽ライフセラミックス展において、大規模な展示、イベント企画に関わり、その労働量、行動量、専門性を体験し、長期、計画的に関わった。
⑤問題解決力	登り窯改装において、改装工事のため、考えていない状況になる場合もあったが、その都度考え、最良と思われる判断をすることができ、問題を解決していくことができた。
⑥地域の方との人的ネットワーク	活動全般を通して、多くの地元の人とかがわることができた。またその人達にも、信楽人の存在を知っていただくことができた。

成果物／制作物



楽座新聞



トウキョウコレクションパネル



Ogama DM

総括

指導教員から 人間文化学部 印南比呂志

今年度は信楽まちなか芸術祭という大きなイベントが行われた中、学生は地元、各専門業者と共に作業を行い、プロの仕事とはどういったものかということを感じてきたと思います。その経験は学業では得られないほど大きく、自分の好きなことを仕事にするためのスキルと現在の自分とのギャップを感じることができたのではないかと思います。そしてそのギャップをいかにして埋めていくか考え、行動することで、今回の経験を今後の学生生活、また社会人となる上で活かしていただきたいと思います。

近江楽座活動年度

H16

H17

H18

H19

H20

H21

20

21 バンデイラ・ジ・オウロ

チーム名	チーム・バンデイラ・ジ・オウロ
代表者	谷口理恵
代表者所属	人間文化学部
メンバー数	14人（うち学生コアメンバー5人）
指導担当教員	河かおる、武田俊輔、泉泰弘
活動場所	愛荘町内、彦根市内
関係団体	セスタ・バジカの会
活動概要	ブラジル人学校とブラジル人保育園での日本語指導を行っています。活動を通して、在住外国人の子どもたちが日本語を継続的に学習できる環境を創り出し、長期的には「自立」を図ることを目標にしています。



チームからの活動報告

成果 - できたこと -

生きた日本語を楽しみながら学ぶ機会を作ることができた。／定期的に訪ねることで、お兄さん・お姉さんの存在として信頼関係を築くことができた。／スタッフの方々との信頼関係を築くことができた。／学校訪問を行ったことで、担任の先生などと情報を交換し、共有をはかることができた。／同じような活動されている他の団体の方とコネクションを持つことができた。

課題 - できなかったこと -

ポルトガル語について、「叱る」「褒める」「注意する」などの重要な場面で使えるよう、学習する必要がある。／日本語指導や学習指導のスキルをさらに向上させる。／放課後学習支援事業に関して、子どもたちが集中して宿題に取り組む環境作りが不十分であったため見直す。／コアメンバー増員に力を入れていく。／ネットワークを広げていく。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目	チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	他団体の活動を視察したことで、学生だけで活動していく方法や支援の仕方を学んだ。様々な講師を招いての研修事業を通して、在日外国人の生活の現状や子どもとの接し方などの知識を得ることができた。そこで得た知識を使って問題を解決していくことが出来た。
②交渉力・コミュニケーション能力	研修事業では、講師とのやりとりを通じてより効果的な事業にすることができた。また、小学校や保育園のスタッフの方々の要望を十分に理解して、自分たちの活動に反映させることができた。
③計画力・スケジュール管理能力	毎週の会議で、基本学習計画や活動予定、活動内容などを把握することが出来た。またそれをチーム全体で共有し、子どもたちが抱える課題とそれに応じて重点的に教えていくべきことや、教え方について計画し、それぞれのスケジュール管理ができるようになった。
④企画・プロデュース力	コレジオ・サンタナでは月に1度、学生による企画授業であるお楽しみ会を開催し、自分たちで授業を組み立て様々なジャンルの授業を企画することができた。
⑥地域の方との人的ネットワーク	小学校に訪問することで、私たちの活動を知ってもらい、子どもに関する情報を共有することが出来た。講師の方を招いて研修を行ったり、講演会に出向いたり、セスタバジカの活動に参加するなかで、同じ目的を持って活動する団体とのつながりを持つことができた。これらのつながりにより、前提となる知識や状況、指導上のノウハウを学び、悩みを相談しアドバイスを貰うことが可能となった。
⑦学内での新たな出会い・交流	勧誘活動を行うことで他学部他学科の学生もメンバーに加えることが出来た。また、学生起業家や有識者も加わり、新たな視点からのアドバイスを得たり、他団体と協力して活動を進めることができた。

活動を振り返って

今年度から活動し始めた我々にとって土台作りの一年であった。コレジオ・サンタナでの活動では、後期から我々が主体となって企画授業を行うことで、子どもには楽しみながら日本語に触れてもらうことが出来た。ベケーノ・ポレガールでの活動では、小学生の学習支援や就学前の子どもの保育のサポートを行った。今後の展望としては、第一に、コレジオ・サンタナにおいては日本語指導をより充実させる必要がある。また、ベケーノ・ポレガールにおいては、現在も行っている子どもたちの宿題の指導に、一層力を入れて取り組んでいきたい。そのためには、チームメンバーの増員が不可欠であり、まずはこちらに全力を注いでいく。また、指導の質もさらに上げていきたい。コレジオ・サンタナやベケーノ・ポレガールの先生方はいつも我々を快く受け入れてくれている。そんな方々の期待に応えるため、これからも支援が出来るよう活動を続けていきたい。

成果物／制作物



楽座新聞

総括

指導教員から (抜粋) 人間文化学部 河かおる

このプロジェクトは、2009年度に実施された地域文化学科の環琵琶湖文化論実習で「多民族・滋賀—『在日外国人』から滋賀を見る」というテーマの活動に参加し、日本および滋賀県における外国人の実情について様々な角度から学んだ学生が中心となって発足した。一年の活動を通じて、様々な試行錯誤の末に、学生自身が自律的に活動を進められる力量を付けてきたことを、とても頼もしく感じる。また、活動先のブラジル人学校、保育園でも学生の活動に対する期待や信頼が高まっている。その分、期待に応えるだけの活動をするためのメンバーの不足、交通手段の確保など課題は多いが、是非今後も活動を継続してほしいと願っている。

近江楽座のプロジェクト全般の運営のあり方に関して、気になったことを2点コメントする。

- (1) 公開プレゼンテーションによる審査の際、審査委員の間で、「地域活性化」の意味について、十分な議論・すり合わせをした上で審査にあたって頂きたい。
- (2) 活動場所への移動について、楽座事務局で車を保有して貸し出す、経費でのタクシー乗車を認めるなどの、現実的な対応策をご検討いただきたい。

近江楽座活動年度

H16

H17

H18

H19

H20

H21

21

22 石山アートプロジェクト

- チーム名** いしアート
代表者 川村浩一
代表者所属 人間文化学研究所
メンバー数 7人（うち学生コアメンバー2人）
指導担当教員 森川稔、佐々木一泰
活動場所 石山商店街周辺
関係団体 石山商店街振興組合、知的障害者授産施設「瑞穂」
活動概要 石山商店街で、作家・ハンディキャップを持つ人・地域の方とアートを制作します。さらに幅広い領域の方に参加していただき、新たなまちづくりネットワークの礎をつくることを目標としています。



チームからの活動報告

成果 - できたこと -

ワークショップは台風の影響を受けたものの計画通り行えた。意見交換会は今年度初の試みであったため、当初の予定回数よりは減ったもののプロジェクトに関わる人が一同に話せる機会を設けられた事は成果の一つである。また、石山アートまつりの開催と合わせて京阪電車石坂線みんなで文化祭とコラボレーションできたことも成果として挙げられる。

課題 - できなかったこと -

地域住民を対象とするヒアリング・アンケートは時間と人力が必要であったため実施できなかった。web・ブログを通じての広報も手が回らず思ったように更新できなかった。今後は、楽しい内容をこまめに更新する体制を整え、情報発信の充実を図りたい。

スキルアップ - 新たに得たこと -

項目	チームとして得られたスキルの具体的事例
①専門知識・技術	まちあるきを開催するにあたり、事前に商店街の人と出来るだけ接し、今まで知らなかった街の歴史や人物像を知ることができた。
②交渉力・コミュニケーション能力	商店街の中でワークショップを行うにあたって、協力してもらう店舗を一軒一軒まわり、探した。営業中にお店の中を見学させてもらえる様、営業活動に取り組んだ。
③計画力・スケジュール管理能力	毎月開催したワークショップは、かなりタイトなスケジュールとなったが、計画をこなしながら次の計画を立てることでスキルアップにつながった。
④企画・プロデュース力	健常者だけでなくハンディキャップを持つ人も参加できるワークショップの企画を行った。普段意識する事のない諸条件のもとでの企画が求められた。
⑥地域の方との人的ネットワーク	昨年度から携わってもらっている商店街の人、障がい者施設の人はもちろんのこと、今年度は新たに滋賀大学の学生や京阪電車との関係が生まれた。

活動を振り返って

石山アートプロジェクトは、石山でしかつくることのできないアートを共に制作することを通じて地域の人、商店街の人、ハンディキャップを持つ人、また、アーティストや学生をつなぐプロジェクトです。今年度は、プロジェクトの継続のため、関係者が一同に意見交換、情報交換できる機会を設け、組織化を試みています。全体の方向性をまとめるテーマとして、「人と人、人と街がつながる風景」を設定しました。活動メンバーに新たに滋賀大学教育学部の学生が加わり、また、京阪電車を愛する会主催の京阪電車「石坂線みんなで文化祭」とのコラボレーションが実現し、地域の活動と連携したプロジェクトへの広がりをみせています。今後は継続してプロジェクトの一般化に取り組みながら、より多くの領域の方に参加して頂けるよう新たなワークショップの内容、手法を試行しながらネットワークを広げていきたいと考えています。地域のヒト・モノ・コトを様々な人が楽しめるアートとして記録し、それを地域の人自らが活用できるようにしたいと思います。

成果物／制作物



楽座新聞



巡回展 DM



招き猫探しカード

総括

指導教員から (抜粋) 人間文化学部 森川稔 佐々木一泰

(森川稔)

石山商店街ではじめて取り組んだ昨年の経験が、今年の活動に生きたように思われる。参加者の数が増え、その顔ぶれに幅が出たことに加えて、「アート」の内容も多彩になった。空き店舗での取り組みにとどまらず、会場がまちに広がったこと、そして滋賀大学教育学部の院生・学生と協働したことも、今年の大きな成果といっていだろう。これからどのように展開していくか。担い手も含めて、課題といえよう。

(佐々木一泰)

活動を振り返って、まず難しかった点ですが、去年との違いに対しての意識です。それは、プロジェクトの有効だった点や課題点の整理・言語化が必要ですが、プロジェクトを運営しながらの、主観と客観が入り混じる中では、その視座を獲得する難しさはプロジェクトに皆が一番痛感した部分だったのではないのでしょうか。良かった点としては、活動に対しての新たな取組を加えられたということ。他大学との協働や、京阪電車からの協力で、アートプロジェクトの範囲を広がられた事が挙げられます。さらに、石山の活動に対して地域の人への拡がりが見えた事です。

4 共通プログラムの報告

4-1 楽座セミナー2010 「イザ!カエルキャラバン! in HIKONE」 実行委員募集(仮)

実施目的

イベントづくりのノウハウを学ぶ。今や1万人規模で行われている楽しい防災イベント「イザ!カエルキャラバン!」を題材に、このセミナーではイベント設計のシュミレーションを実際に行います。イベントの準備委員となって(なったつもりで)、一からイベントづくりを体験します。集客、資金調達、効果的な広報、ネットワークづくり、などみんなが頭を悩ます問題へのアプローチの仕方を、数多くのイベントを企画、実施している永田宏和さんから伝授してもらいます。

実施概要

■第1回 平成 22 年 11 月 25 日 (木) 18:15 ~ 20:15

講師・永田宏和さん (NPO 法人プラスアーツ理事)のお話、グループワーキング

参加者 16 名(学部生、院生、OB、一般)

■第2回 平成 22 年 12 月 7 日(火)18:15 ~ 20:15

グループワーキング、発表会、講義

参加者 20 名(学部生、院生、OB、一般)

場所：滋賀県立大学交流センター

実施内容

■第1回

【前半】永田さんのこれまでのお仕事をもとにイベント設計に関する基本的な講義。

「イザ!カエルキャラバン!」では、“かえっこ”というおもちゃ交換ゲームの仕組みを取り入れたことによって、爆発的な集客力をもつようになった。成功の秘訣は、家族をターゲットにしていること、レポートが狙えるシステムになっていること、そしてなによりみんなが楽しめること、これらがすべて満たされ、計算し尽くされたプログラム構成にありました。それらはすべて、綿密な調査から始まると永田さん。「なんとなくおもしろそう」では、集客につながらな

い、イベントはなかなか奥が深いものであることを学びました。

【後半】イベント設計のシュミレーション(4グループにわかれてワーキング)。

「イザ!カエルキャラバン! in HIKONE」 実行委員となって(なったつもりで)、プログラムを考えました。

■第2回

第1回の講義で教えていただいた“かえっこ”のシステムを活かしたイベントのアイデアを各チームで議論し、それぞれのグループでアイデアをまとめ、発表しました。

イザ!カエルキャラバンの本筋であるテーマ「防災」からは離れたアイデアが多かったのですが、アイデアに自由度がでるのも、「かえっこ」の特徴の一つだそうです。どのアイデアもとても魅力的で、「ぜひ実現させてほしい」と永田さんからお墨付きを頂くことができました。最後に、永田さんのお仕事の紹介と、イベントをブランディングすることの必要性を講義していただきました。環境科学部環境政策・計画学科の近藤隆二郎先生もアドバイザーで参加して下さいました。



らくざセミナーチラシ



>> 第1回 講義・ワークショップ

「なんとなくおもしろそう」ではイベントは成り立たない！永田さんの講義を聞いて、イベント企画のワークショップへ。



>> 第2回 まとめ・発表

第1回で出たアイデアを各チームで議論し、まとめて発表しました。

4-2 中間面談

開催日時・参加者

■平成22年11月26日（金）

1限（9:00-10:30）：グループ2（七曲がり、信楽人、おとくら）

事務局：秦・池田・上川、専門委員アドバイザー：細馬先生、指導教員：奥貫先生

放課後（18:10-19:40）：グループ3（とよさと快蔵、TTP、とよさらだ、木楽部会）

事務局：上川・久保田、専門委員アドバイザー：鵜飼先生、指導教員：迫田先生

■平成22年11月29日（月）

1限（9:00-10:30）：グループ1（男鬼楽座、古民家楽座、未来看護塾）

事務局：秦・上川、専門委員アドバイザー：村上先生

4限（14:50-16:20）：グループ5（荒神山ロックフェス、バンデイヤ・ジ・オウロ、いしアート）

事務局：秦・上川、指導教員：佐々木先生・河先生

5限（16:30-18:00）：グループ7（県大地域食育推進隊、DIG'S、長浜BASARA）

事務局：秦・上川、専門委員アドバイザー：小野先生・柳澤先生

指導教員：印南先生・岡本先生・佐々木先生

■平成22年11月30日（火）

4限（14:50-16:20）：グループ4（一姓、あかりんちゅ）

事務局：池田・上川、専門委員アドバイザー：柳澤先生

5限（16:30-18:00）：グループ6（生活デザイン14期生、ハーモニー、菜の花エネルギー、廃棄物マスターズ）

事務局：池田・上川、指導教員：徳満先生

結果概要

■チーム発表

○地域の方とのつながりについて

・地元「やってもらえる」、学生「やらせてもらえる」のいい関係ができています。

・一部にとどまっておらず、もっとコミュニケーションをとりたい。

・地元の人に加え、他大学や企業とのネットワークも広がった。

・拠点整備が進んで、幅広い層と連携できた。

・誰を対象に、どんな点に重点をおいて交流を図っていくか、具体的に考えたい。

・高大連携授業や小学校出前授業は好評で、引き続き希望が出ている。

○引継ぎ

・活動の主体が1、2回生で、人数も少なく個人にかかる負担が大きい。

・前代表と新代表が一緒に活動する時間をつくることを、心がけている。

・地域の人とのコミュニケーションの方法についても、引継ぎを行ったほうがよい。

○広報・情報発信

・広報ツールを整備したことで、自分たちのやりたいことが伝わりやすくなった。

・広報時期を早めて、集客をもっと増やしていきたい。

○交通手段

・活動場所までの交通手段の確保が大変。

○活動拠点

・拠点となるところがなく、メンバーが集まりづらい。

・普遍的なテーマを地域に伝えていく活動をしているチームは、成果が得られたら、拠点を移していくような関わりも検討してはどうか。

○体制

・4班構成で分担しているが、連絡調整をもっと密にとっていく必要がある。

- ・チーム内のコミュニケーションは、メーリングリストやミーティングで行っている。
- ・来年度以降、活動資金を販売収入でまかなえるようにして、楽座から独立したいと考えている。

○その他意見

- ・活動の楽しさを地元の人に伝えていくことが一番大事。
- ・イベントをすることだけが、地域活性化ではない。地道に草の根的に積み重ねる活動も、もっと評価されてもよい。
- ・学生が専門的な視野で間に入って、地域の人々をつないでいく形が理想。
- ・近江楽座をベースに他の助成金事業に応募することで、活動をさらに展開することができるのではないか。

■今後の活動に向けて

- ・先行事例の調査をしよう。
- ・他チームとコラボレーションしてパワーアップしよう。
- ・地域の方に協力してもらって、人脈を広げよう。
- ・目標管理をしよう。

■要望

- ・予算の使い方や交通手段、学外専門家とのネットワーク構築、ホームページづくりのサポート等。



事務局・専門委員会・チームでの面談

4-3 環びわ湖大学地域交流フェスタ2010

実施概要

■日時：平成 22 年 12 月 11 日（土） 13:00～17:45

環びわ湖大学・地域コンソーシアム主催の交流フェスタを滋賀県立大学交流センターで開催しました。

学生や大学の地域との連携活動を紹介する「ポスターの展示・発表」と4つのセッションに分かれての「研究交流会」が行われ、黍嶋久好氏（愛知大学三遠南信州地域連携センター）の「基調講演」では、地域からみた大学、大学からみた地域、双方の立場での取り組みを紹介いただき、連携することの意味や大学が地域の中で担っていく新たな役割について報告いただきました。

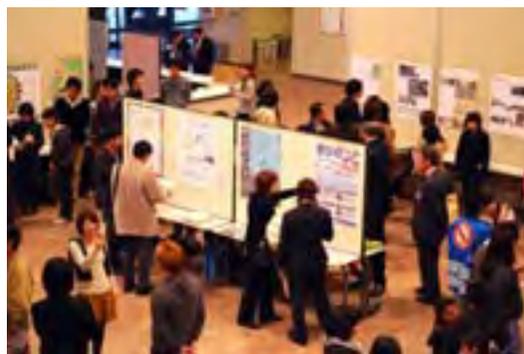
各大学の学生はじめ教職員、自治体関係や一般の方など 250 名の参加があり、大学間、大学と地域との活発な交流が行われました。

滋賀県立大学からは、近江楽座の全 22 チームが「ポスター展示・発表」を、また「一姓」と「信・楽・人-field gallery project-」、環境科学部環境政策・計画学科の鶴飼修先生がセッション発表を行いました。

最後に、7団体に活動奨励賞が授与され、滋賀県立大学は「ポスターセッション」の部で、Shiga 食育推進プロジェクトと DIG'S が活動奨励賞を受賞しました！



成果報告会チラシ



>> ポスターセッション

全 22 チームが活動紹介ポスターを作成。掲示された自分のチームのポスターの前に立ち、興味を持たれた方に活動の説明をしました。



>> セッション発表

近江楽座からは「一姓」と「信・楽・人-field gallery project-」の2チームが発表しました。

4-4 他大学との交流<金沢大学>、<兵庫県立大学>他

金沢大学との交流会

■平成23年2月7日（月）13:00～16:00

金沢大学の地域創造学類地域プランニングコースのみなさんが近江楽座の視察に来てくださいました。昨年に引き続き、今年も学生さんがたくさん来てくださるとのことで、学生交流会というかたちで行いました。

■第一部（各大学の取組みのプレゼン）

金沢大学地域創造学類地域プランニングコースには、「まちづくりインターンシップ」という必須単位があります。地域の受け入れ先で、課題に取り組む実習形式で、夏休みなどの期間中に、いくつかの受け入れ先に派遣されます。先生の引率はなく、学生だけで地域に入っていきます。インターンシップの実習概要を、担当の神谷浩夫先生が説明してくださいました。

事例発表

【金沢大学】

「大聖寺インターン」、「加賀夜祭」、「金澤ひがし竹あかり」の発表。みんな2回生でしたが、プレゼンがとても上手でした。笑いを交えた引き込まれるプレゼン。みならいたいものです！

【滋賀県立大学】

近江楽座チームの発表「Taga-Town-Project」と「とよさと快蔵プロジェクト」の発表。

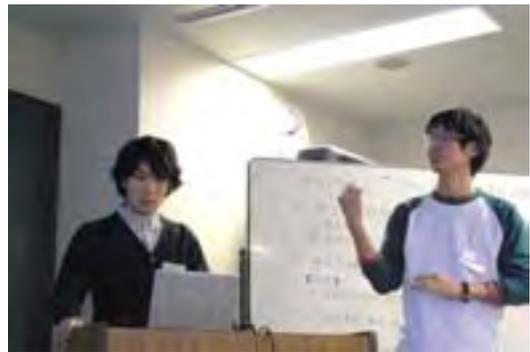
活動の楽しさやこれまでの取組み実績がうまく盛りこまれた発表でした。どちらも、近江楽座ができた年から活動を続けている老舗プロジェクトなので、金沢大の取組とよいコントラストになっていました。

■第2部（意見交換会）

「地域で学ぶこと、気づくこと」をテーマに、はじまり、活動を通じて、ふりかえりの3つのパートで、それぞれの活動を振り返りながら意見交換しました。

「まちづくりインターン」と「近江楽座」では、単位が出るか出ないか、活動の継続性など取組の枠組みは異なりますが、あえて違う立場で「地域で気づいたこと」や「学んだこと」を議論し合ううちに、自分たちの活動の良いところや改善できる場所が見えてきたようでした。

金沢大の学生さんのひとりが、「近江楽座の活動を知って、地域での活動を単発で終わらせないで、続けていきたいと思った」という感想を残してくれたことが、とても印象に残りました。参加した学生さんは普段感じることでできない多くの「気づき」を得られたのではないのでしょうか。



上：金沢大学の取組みのプレゼン/下：意見交換会

兵庫県立大学との交流

■平成 23 年 1 月 31 日（月）12:30 ～ 16:00

兵庫県立大学環境人間学部の先生方 7 名が近江楽座の視察に来られました。同学部では、学部の各コース・課程の活動を横断するエコヒューマン地域連携センターを立ち上げるにあたって、本学の取組を参考にされるということで、楽座専門委員会座長の印南先生と事務局だけでなく、学生プロジェクトから、「Taga-Town-Project」と「とよさらだプロジェクト」が参加し、自分たちの活動を発表しました。

学生たちの発表に対して、先生方から活発な質疑、応答があり、外部から活動进行评估していただく貴重な機会になりました。



「とよさらだプロジェクト」のプレゼン

4-5 成果報告会 近江楽座活動報告イベント まちづくりファーマーズフェスタ まちをたがやす人たちの感謝祭

開催目的

学生たちが近江楽座として取組んだ1年間の活動内容を発表し、成果や課題を共有し、「学生力」を生じた地域活性化の取組みについて、地域と大学がともに考えていくことを目的に開催します。

開催日時

2011年4月23日（土）9：30～16：40

開催場所

滋賀県立大学 交流センターホワイエ、研修室1-6

開催概要

9:30～9:45 開催挨拶と説明／曾我理事長挨拶／プログラム説明
 9:45～14:30 グループ発表／活動共有ワークショップ
 14:30～14:45 休憩
 14:45～16:05 全体報告会
 ～16:40 全体総括・閉会

開催内容

近江楽座のチーム学生が約80名、一般学生や

地域関係者約40名、教職員約20名、その他を含め140名以上が参加。4つのグループに分かれての活動発表とワークショップにより、中身の濃い報告会となった。

また、近江環人や近江楽士（地域学副専攻）の受講生にも参加してもらい、楽座活動に取り組んだ学生の生の声を聞いてもらうよい機会になった。

◆活動共有ワークショップ

テーマ：活動のやりがい（アピールポイント・成果を含む）／困ったこと／地域との関わり（提案、働きかけ、アイデア出し等）

司会進行とアドバイザーは、次のゲスト講師の方と先生方に担当していただきました。

【Group A】佐々木和之さん（水色舎）、柳澤淳一先生（電子システム工学科）

【Group B】仲野優子さん（しがNPOセンター）、岡本秀己先生（生活栄養学科）

【Group C】小野奈々先生（環境政策・計画学科）、竹岡寛文さん（㈱バードデザインハウス）

【Group D】森川稔先生（地域づくり教育研究センター）、築地達郎さん（龍谷大学社会学部）

主な意見は、後掲参照。

「グループ発表」

Group A 産業・リサイクル	Group B 食・コミュニティ	Group C まちづくり・景観	Group D 伝承・情報発信
男鬼楽座	一姓（いっしょう）	とよさと快蔵プロジェクト	古民家楽座
菜の花エネルギー	とよさらだプロジェクト	DIG'S	Taga-Town-Project
エコキャンパスプロジェクト木楽部会	県大地域食育推進隊	おとくらプロジェクト	荒神山ロックフェス実行委員会
あかりんちゅ	未来看護塾	生活デザイン学科14期生	七曲りで いっちょやったるか！！
廃棄物バスターズ	ボランティアサークル Harmony	信・楽・人 -field gallery project-	長浜BASARA
-	バンデイラ・ジ・オウロ	-	いしアート



学内交流センターホワイエに、全チームの作成した新聞やその他の成果物を展示。



>> グループ発表

4グループに分かれての活動報告。お世話になっている地域の方からアドバイスをいただけたチームもありました。



◆全体報告会

ワークショップの議論の内容やアドバイス提案などをリーダーグループが代表して発表。各チームの代表者もワークショップで得られたことや気づいたことを報告しました。

ゲスト講師や各グループの担当教員からも、ワークショップで確認できた問題点や活動する上で大事にすべき点を述べていただきました。

- ・活動の場所がひとつのポイント（日常的な交流の場ができたとか）。
- ・グループごとのコラボレーション、ピンポイントでのコラボレーションが有意義。
- ・学生委員会のような横断的な活動がほしい。
- ・ビジネスにしていってもよいのではないか。
- ・やりがいと達成感の違いは、達成感が个人中心で、やりがいは相手があって成り立つ。
- ・信頼関係を築いていくには、広報的には、相手を当事者にしていく。オープニングパーティのような事件をつくることも有効。

等

他にも、地域の方からや指導教員の先生方からもコメントやアドバイスをいただきました。

チームの学生からの感想では、

「どのチームも同じような悩みを抱えているんだ」、「自分たちのチームだけでは行き詰まることも、他のチームの協力で解決することができそう」、「チーム間の横のつながりができたら、コラボするなどしてさらに発展的な活動ができるのでは」等、チーム間の横の連携に関するものが多く出されました。

最後に、近江楽座専門委員会の印南座長より、東日本大震災が起き、私たちは、つくられたものは壊れてしまうことを改めて認識した。そして、普通に生活していくことは大変なことで、地域とのつながりや人のつながりは大事なもの。長い時間か

けて築いてきたもの。楽座の活動も続けていくことに意味があり、社会化して行ってほしい、と締めくくりのあいさつをいただいた。



成果報告会チラシ



>> 活動共有ワークショップ

ゲスト講師や先生方にリードしていただきながら、付箋に意見を書いて意見を出し合い、活動のやりがいや問題点を共有しました。



>> 全体報告会

活動共有ワークショップでの成果を貼りだし、各グループの代表が発表。



>> 交流会

プログラム終了後に交流の時間をもちました。



4-6 情報発信

(1) 近江楽座ホームページの運営

滋賀県立大学における、学生の地域活動に関するポータルサイトである近江楽座ホームページの運営を行いました。プロジェクトメンバーの活動において更新しやすく、また多くの人に活動の様子を見てもらえるサイトにカスタマイズするため、2009年度に引き続きレイアウトとプログラムのリニューアルを行いました。

＜リニューアル内容＞

- 1) 各ページレイアウト変更
 - 2) 各チーム HP・ブログとの連携プログラム構築
- また、当ホームページは、ウェブサイトコンテスト「滋賀 web 大賞 2010」の教育・公共団体部門で最優秀賞を受賞しました。



近江楽座ホームページ

(2) プロジェクトレポートの発行

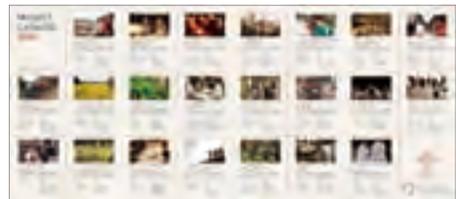
事務局スタッフが、実際にプロジェクト活動現場に取材に行き、活動レポートを作成・発行しました。今季は13号発行。取材日から発行まで1週間以内を基本とし、ホームページに掲載と食堂前の掲示板にも随時掲載し、ニュースレターよりもタイムリーな情報発信コンテンツとなりました。



おうみらくざ
プロジェクトレポート

(3) 活動紹介リーフレットの作成

近江楽座プロジェクトで活動する学生に依頼し、近江楽座に採択されたプロジェクトを写真入りで紹介するリーフレットを作成・配布しました。



近江楽座活動紹介リーフレット

5 地域の声

5-1 活動の現場を訪ねて

学生主体の近江楽座の活動が地域にどのように受け入れられ、地域の活性化に貢献しているのか、また大学と地域の関わりを広げていくためには、どのようなことが必要とされるのか、近江楽座の2チーム、石山アートプロジェクトと信・楽・人がお世話になっている大津市の石山商店街振興組合と甲賀市信楽町の明山陶業株式会社を訪ね、理事長の黒崎弘之さん(65)と明山窯9代目の石野伸也さん(33)から、それぞれお話を伺いました。

■石山アートプロジェクト×石山商店街

石山商店街は、JR、京阪の石山駅周辺から瀬田の唐橋まで伸びる県道石山停車場線、約650mの沿道に形成され、東レや日本電気などの企業立地とともに発展してきた。近年はマンション建設が活発で、人口は増加傾向にあるが、必ずしも地元商店街の利用増につながっておらず、商店街としての魅力づくりが課題となっている。

このため商店街振興組合では、県立大学の森川稔先生の指導を受け、商店街活性化の第2次のアクションプランづくりに着手。平成20年4月には、商店街の空き店舗を活用して、地域の交流の場をつくる「まちのえきづくり」を構想。滋賀県立大学の学生グループとともに、空き店舗の改装案を全国の学生に求める設計コンペを実施した。

近江楽座の活動の地域での受け入れについて、その翌年、石山アートプロジェクト(略称:石アート)を立ち上げた林宏美さん(当時、人間文化学研究所2回生)は、商店街の方々がこのプロジェクトを受け入れて下さった理由の一つとして、設計コンペによって県立大学の学生と商店街の方々との協働の下地ができていたことが大きかったと述べている。もう一つの理由は、石アートが提案したハ

ンディキャップを持つ人との協働について、商店街としても取り組みたいと考えておられ、タイミングがちょうど合ったようだ(「近江楽座2009年度活動報告書」より)。

商店街として大学と関わったのは、平成19年度に各店舗のシャッターに各店オリジナルの「あきない紋」を描くことを成安造形大学の協力を得て実施したことがはじめてだった。簡単に出来るものと考えていたが、実施まで1年かかったそう。時間がかかったが、先生が授業として取り組んで下さったので、学生たちも1軒1軒訪ね歩いて、その店にふさわしいデザインを考え、描いてくれたのがありがたかった。大学に協力依頼した理由は、「あきない紋」の制作は、自分の店のオリジナリティを見つめ直す機会になり、学生たちと身近に接することで、商店街の人たちにもきっと刺激になると考えたからだ。

学生に出来ることについて、黒崎さんは、「商店街のおやじとは違う発想が出来る。若い学生の意見にはカルチャーショックを受ける」とおっしゃる。たとえば、これまで景観上、電柱は撤去するほうがよいと考えていたが、ごちゃごちゃしているのが

石山らしくてよいと若い人たちは考えている。また、学生たちは街全体を見て、街のおもしろいスポットを発見してくれる。等々

「学生がやっているからと言って、商店街のお客さんが増えるわけではない。しかし、学生は僕らとは違う目線や思考、アイデアを持っている。逆に僕らは勉強になっている」、「商店街をどういふふうに活性化していくかを考えた時、僕らがやることは決まっている。マンネリ化してくる。しかし、学生が考えたことが、新しいイベントになる可能性はある」と、学生の活動に期待をかけてくれる。



石山商店街振興組合理事長 黒崎弘之さん

石山商店街には、夜市という40年以上続く名物行事があるが、今まで出し物は、食べ物やゲームが中心だった。そこに、3年前、県立大学の石アートの学生が関わるようになって、ファッションショーを開催することになった。最初は、「なんで、夜市にファッションショー?」と思ったそうだが、お母さんたちには大好評だった。今年は滋賀大や龍谷大学の学生も参加して、落語をしたり、留学生がドイツ料理や台湾料理を出したりした。学生の活動が地域に新しい風をおこし、人とひとの出会いを生みだすきっかけづくりになっていることは間違い

なさそうだ。

ところで、実際に学生たちが地域で活動を進めていくには、学生たちも地域の人たちにきちんと説明することが求められる。商店街振興組合のトップや三役だけと話をしてもだめで、自分たちがやりたいことを理事会のメンバーに説明して、理解してもらわないと進まない。そうした地域と協働して物事を進める作法を現場で学ぶことになるので、学生たちは1年間でかなり鍛えられる。時には厳しい議論もするそうだが、商店街の人たちはみんな温かく見守ってくれている。

1年ごとに学生のメンバーや内容は変わっていくが、地域はずっと続いていくものである。そのため、地域としては、継続性を大事にしている。黒崎さんは、「継続は事業なり」と、おっしゃる。「1年、2年、3年と続けているうちに認知されてくるので、活動の中心になっている学生には、後輩を連れてきてほしい」と、頼んでいる。

また、「1年間の活動が終わると、関係者みんなに集まってもらって、総反省会をやっています。県立大学の森川先生や佐々木先生にも来てもらっています。車座になっての飲み会です。はい終わりました、ご苦労さまでは、ちょっとね。どうつながかが大事ですね。幸い、石アートの代表の川村浩一君が県大だけでなく、滋賀大や龍谷大学の学生にも声をかけてくれて、関わってくれる学生が広がってきているのが、嬉しいですね」、「商店街としても、石山の名物をいろいろ発掘して、まちのえき構想を実現してきたいです」と、学生の活動をつないでいく秘訣や抱負を語っていただいた。

■ 信・楽・人 × 明山陶業株式会社

近江楽座の信・楽・人が明山陶業から登り窯とその周辺施設の改装を依頼されて取り組んだのが Ogama 改修プロジェクトである。信・楽・人が 2007 年から 2009 年にかけて改装・整備と企画運営を行ってきた交流拠点 shiroiro-ie が出来たことがきっかけとなって、信・楽・人に声がかかったのである。

信楽焼の産地では製造と販売の業態が専門分化し、窯元は長年、卸小売業の依頼に基づき商品をつくり続けてきた。しかし近年はインターネットが普及し、また景気低迷の中、多様な消費者ニーズに対応した創意工夫のある取組みが求められるようになってきた。

明山陶業でも 6 年前に自社ホームページを開設し、通販やオーダーメイドの商品づくりに力を入れてきた。自らづくり手であるとともに商品企画、開発を担っている石野伸也さんは、ネットを導入したことで、「エンドユーザーさんに直接、訴えることができる。直接つながることができるので、本当にほしいもの、求めているものがわかる」と、その効用を説かれる。そして、お客さんと直接、ふれあうことが出来る店舗の必要性も感じておられた。一方で、信楽の地域素材をもっと生かしていくことも。

他のまちでは酒蔵とか活用しているが、信楽にはいいものがたくさんあるのに十分に生かしていない。登り窯もそんな貴重な資源のひとつである。今では使われなくなった産業遺産として、まちの所々に残る登り窯のある風景は非日常的でどこか落ち着くものである。

Ogama は窯元散策ルートの中央、頂上部の斜面にあって、休憩するにはちょうどよいところに位置している。



明山窯 9 代目 石野伸也さん

こうして、2010 年 6 月、登り窯の再生・保存と隣接する作業場をカフェとショップに改装するプロジェクトが始まった。石野さんは、「学生に出来ることと専門の業者に任せないといけないところ、ひとつひとつ学生と話を進めました。ポイントは後ろを決めることです。そうすると、何をしないといけないかがわかる」と、学生との協働のプロセスを振り返る。なかなか出来ることではないが、しんぼう強く学生に任せることを大事にされている。任されると人は力を発揮する。学生たちは、「信楽陶芸トリエンナーレ 2010」信楽まちなか芸術祭（10～11 月）に間に合わせるため、7～9 月に集中して作業を行った。他に、学生力については、「グラフィックや商品の見せ方など、学生から学ぶことも多い」、「新しいものをつくる時には学生の意見を聞きます」と、若者のセンスに期待しておられる。

まちなか芸術祭の間、期間限定で取り組んだカフェ&ショップを石野さんは、その後も継続して運営していくことを決め、Ogama として新たなスタッフを雇用することにした。その人材募集に「ハイ、私やります」と手を上げ、採用されたのが、夏から活動に参加して、信楽のこのプロジェクトに、どんだんのめり込んでいった盛千嘉さん（現在、建

築デザイン学科4回生)である。

学生活動から雇用・就職へ。石野さんにお話しを伺ったあと、Ogamaを訪ねると、たまたま盛さんにお会いすることができた。盛さんの話を少し紹介しよう。



建築デザイン学科4回生 盛千嘉さん

「今年の4月から信楽に住んで、ここでアルバイトをしています。」志望した動機について、彼女はこう言う。「ここはいい条件が揃っているんです。信楽の窯元散策路の中で、峠の上にあって、ひとつのポイントなんです。まちづくりを進める上で大事な位置にあるんです。プロジェクトに関わって明山窯の石野伸也さんがいい人だったのも就職を決めた大きな理由です」、彼女は建築デザイン学科の学生である。その当たり、自分の専門性との関わりについては、「建築の仕事は、ある意味、編集の仕事です。だから、今やっているチラシをつくったりすることとそう離れていないんです。これからは事務的な管理もやっていくつもりです。今は、職人さんがそういう仕事もやっている。そういう部分を整理して、つくることにもっと時間をとってもらいたいと考えています。」「アトリエづくりも進めていくつもりです。でも身の丈にあったことし

かやりません」と、しっかりと答えてくれた。

石野さんも、「やりたいということに、責任を持たせてあげて、やらせてあげたらよい」という考えで、盛さんはカフェやショップの運営など、Ogamaのマネージメントを一手に任されている。引き続き登り窯とその一帯の改装・整備が滋賀県立大学も協力して進められている。Ogamaの発展とともに彼女自身がこれからどのように成長していくか楽しみである。

(聞き手 近江楽座事務局・秦憲志、近江楽座学生委員会・本間浩平)

5-2 地域関係者のメッセージ

■ バンディラ・ジ・オウロ



放課後学習支援事業を行っているブラジル人保育園 ペケーノ・ポレガールの保育士
イシイ・サチコさん

バンディラ・ジ・オウロの活動が始まってから小学校に行っている子どもたちが、勉強もやる気が出てきて、宿題とかも一生懸命がんばっています。保育園の方でも、小さい子どもたちがバンディラ・ジ・オウロのメンバーと楽しく遊んだりして、日本語も少し話せるようになっていきます。これからも、バンディラ・ジ・オウロのメンバーを増やしてもらって、もっと長く活動を続けてほしいなと思っています。これからもよろしくお願いします。

■ 県大地域食育推進隊

彦根市健康推進課・彦根市福祉保健センター 宮尾智香子さん

市民が食育に対する意識や関心などを広く持つことを目的に、各関係機関と連絡をとり、食に関する情報や取組みを紹介するために、「ひこね食育フェア」を、6月にピバシティひこねで実施しました。県大地域食育推進隊は「骨密度測定」を実施し、行列ができるほど人気がありました。骨密度測定を通じて食事に対する関心が高まり、食生活の改善や家庭での食育促進につながっていくものと思います。今後は、出来れば、子どもを対象とした舞台でできる活動にも取り組んでほしいと思います。

また、10月の「元気フェスタ」では、模擬店で地場産品を取り入れた食べ物を販売し、とても好評でした。統一した「食育エプロン」を着用し、アピール力は抜群でした。今後は模擬店での販売だけでなく、スポーツを楽しまれる方たちなどにも食育に関心を持ってもらえるような取組みを一緒に考えていきたいと思っています。

6 付録

6-1 プログラム推進メンバー

事業推進代表者

滋賀県立大学理事長 曾我直弘

事業推進責任者

近江楽座専門委員会 委員長 印南比呂志

近江楽座専門委員会

環境科学部

浦部美佐子

野間直彦

鶴飼修

小野奈々

松岡拓公雄

村上修一

迫田正美

杉浦省三

工学部

徳満勝久

河崎澄

柳澤淳一

人間文化学部

濱崎一志

石川慎治

印南比呂志

森川稔

山根周

細馬宏通

人間看護学部

伊丹君和

本田加奈子

地域づくり教育研究センター

奥貫隆

近江楽座事務局

秦憲志

上川七菜

池田恭子

このほか、近江楽座に関わり支援いただいたすべての方にお礼申し上げます。

6-2 メディア掲載情報

日時	チーム	メディア	見出し
1 H22.7.19	男鬼楽座	京都新聞インターネットニュース	屋根葺き替え 学生ら挑む 彦根・廃村の古民家
2 H22.7.20	男鬼楽座	京都新聞	屋根葺き替え 学生ら挑む 彦根・廃村の古民家
3 H23.2.2	男鬼楽座	FM滋賀	彦根市の男鬼（おおり）の集落とその魅力について聞く
4 H23.2.25	男鬼楽座	NPO法人木野環境HP	(男鬼についての取材を受けました。)
5 H22.10.15	古民家楽座	広報ひこね	まち歩きイベント（河原町～芹町沿線）
6 H23.1.29	とよさと快蔵プロジェクト	中日新聞	県立大生が納屋を建築
7 H23.3.10	とよさと快蔵プロジェクト	京都新聞	古民家の改修活動紹介
8 H23.3.11	とよさと快蔵プロジェクト	中日新聞	古民家再生を紹介
9 H22.11.30	菜の花エネルギー	中日新聞	県立大生出前授業 エネルギーや環境テーマに
10 H23.3.7	菜の花エネルギー	毎日新聞	ふれあいテント村 楽しみながら学ぶ
11 H23.2.26	一姓	中日新聞	野菜で地元と交流
12 H22.7.28	とよさらだプロジェクト	びわ湖放送	キラりん滋賀
13 H23.1.29	とよさらだプロジェクト	中日新聞	地域に純粋な顔。完成
14 H22.12.12	あかりんちゅ	京都新聞	夜彩るエコろうそく 県立大生ら製作使用済み品 寺から回収「イベントで利用を」
15 H22.12.20	あかりんちゅ	TBSテレビ	みのもんたの朝ズバッ！
16 H22.12.23	あかりんちゅ	FMひこね	
17 H23.1.11	あかりんちゅ	読売新聞しが県民情報	幻想的な夜を
18 H22.6.20	県大地域食育推進隊	中日新聞	食育の取り組み15団体が紹介
19 H22.8.12	荒神山ロックフェス実行委員会	FM彦根	17:30～
20 H22.8.16	荒神山ロックフェス実行委員会	FM彦根	8:45～
21 H22.12.22	未来看護塾	彦根新聞	滋賀県立大学人間看護学部「未来看護塾」のメンバー 彦根市立病院小児病棟でクリスマス会
22 H22.6.24	廃棄物バスターズ	毎日新聞	廃棄プラスチックでプランター
23 H22.12.5	ボランティアサークルHarmony	中日新聞	障害のある子ら音楽や踊り満喫
24 H22.12.12	ボランティアサークルHarmony	京都新聞	大学と地域の交流紹介
25 H22.8.19	DIG'S	NHK	おうみ発610
26 H22.8.19	DIG'S	ZTV	
27 H22.8.20	DIG'S	中日新聞	身近な自然学んだよ
28 H22.8.20	DIG'S	京都新聞	自然と暮らしの音見つけた
29 H22.4.2	おとくらプロジェクト	近江同盟新聞	西村さん高宮で初イラスト展
30 H22.4.7	おとくらプロジェクト	滋賀・彦根新聞	西村さん絵画展
31 H22.4.8	おとくらプロジェクト	中日新聞	イベント参加者描く
32 H22.5.2	おとくらプロジェクト	中日新聞	男衆いきいきと
33 H22.5.7	おとくらプロジェクト	近江同盟新聞	高宮太鼓祭のフォトコン
34 H22.6.2	おとくらプロジェクト	滋賀・彦根新聞	高宮「座・楽庵」で邦楽コンサート

日時	チーム	メディア	見出し
35 H22.6.18	おとくらプロジェクト	近江同盟新聞	福山聖子さんの風景画を公開
36 H22.6.18	おとくらプロジェクト	中日新聞	県内の古い町並み描く
37 H22.7.9	おとくらプロジェクト	近江同盟新聞	県立大生によるギター演奏会
38 H22.7.11	おとくらプロジェクト	中日新聞	蔵でライブ 響く歌声
39 H22.7.16	おとくらプロジェクト	近江同盟新聞	夏の思いでに竹のおもちゃ作り
40 H22.8.1	おとくらプロジェクト	彦根会議所だより	
41 H22.8.21	おとくらプロジェクト	びわ湖放送	おうみをDIGZAG
42 H22.9.20	おとくらプロジェクト	中日新聞	ギターにのせオリジナル曲
43 H22.12.1	おとくらプロジェクト	滋賀彦根新聞	みねしまさん作品展
44 H22.12.5	おとくらプロジェクト	中日新聞	美しい歌声にうっとり
45 H23.3.13	おとくらプロジェクト	読売新聞	
46 H22.10.22	生活デザイン学科14期生	ZTV	
47 H22.12.11	生活デザイン学科14期生	ZTV	
48 H22.10.15	信・楽・人-shigaraki field gallery project-	FMしがらき	窯元紹介
49 H22.10.26	信・楽・人-shigaraki field gallery project-	びわ湖放送	おうみをDIGZAG 甲賀市信楽町編
50 H23.2.27	信・楽・人-shigaraki field gallery project-	KBS	勇さんのGoGoユーストン ぶらり散歩～信楽編～
51 H23.2.22	チーム・バンデイラ・ジ・オウロ	読売新聞しが県民情報	外国人の子どもサポート 県立大学生グループ バンデイラ・ジ・オウロ 日本語指導など自立や地域交流促す
52 H23.3.29	チーム・バンデイラ・ジ・オウロ	中日新聞学生之新聞	外国人の子ども支援 日本語教え一緒に遊ぶ
53 H22.8.29	いしアート	中日新聞	アートで地域と交流
54 H22.9.21	いしアート	読売新聞しが県民情報	商店街の魅力発見
55 H22.10.28	いしアート	京都新聞	アートで街の魅力再発見
56 H22.11.7	いしアート	京都新聞	周辺の魅力アートで探る
57 H22.11.23	いしアート	中日新聞	にぎわう石山商店街
58 H22.12.21	いしアート	読売新聞しが県民情報	商店街の凸凹写し取る
59 H22.4.18	全体	京都新聞	特産開発、まちに活気 滋賀県立大生地域研究を報告
60 H22.4.18	全体	中日新聞	「楽座」の活動報告 産業・食などテーマ活気に意見交換
61 H22.5.28	全体	京都新聞	古民家改修など採択22団体決定 県立大「近江楽座」
62 2010年5月号 第1612号	全体	文部科学時報	学生力を生かして地域に貢献
63 H22.12.12	全体	京都新聞	大学と地域の交流紹介 県大でフェスタ展示や研究発表
64 H22.12.12	全体	中日新聞	まちづくり活動県内大学が紹介 彦根でフェスタ

公立大学法人 滋賀県立大学
スチューデントファーム「近江楽座」
まち・むら・くらしふれあい工舎

2010年度活動報告書

平成 23 年 9 月発行

発行 公立大学法人 滋賀県立大学
地域づくり教育研究センター
〒 522-8533 滋賀県彦根市八坂町 2500
TEL.0749-28-8616 FAX.0749-28-8473

企画・編集 近江楽座事務局
印刷・製本 近江印刷株式会社

構成・デザイン 稲葉結実

本書の一部あるいは全部を無断で複写・複製、転載することは禁止されています

近江楽座

まち・むら・くらしふれあい工舎